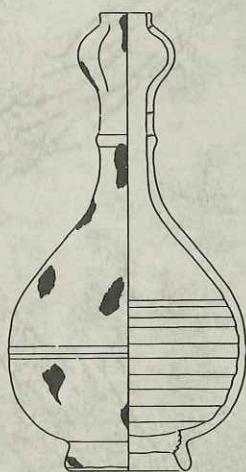


特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1997



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



上 西山光照寺跡整備区

下 第100次調査区全景（主要部）

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1997

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

本年度は、一乗谷朝倉氏遺跡に発掘の鍬が入れられて30年が経過し、また特別史跡に格上げ指定されてから25周年目を迎えるという、大変記念すべき年にあたります。

そこで、当館では、これらの記念の年にふさわしい特別展として、「眠りからさめた戦国の城下町」を催すことといたしました。発掘の成果をご理解いただけるよう、出土総数150万点にも及ぶ膨大な量の中から350点を厳選展示し、また整備の様子がパノラマでご覧いただけるよう、遺跡中心部の地形模型を制作しました。さらに茶の世界を書院作りのジオラマで表現しました。

夏場の約40日間という短い期間ではありましたが、1万人を超す入場者が展観され、多大な評価を得ましたことは主催者として感謝の念に耐えないところであります。

年次調査では川合殿地係において武家屋敷3区画を発掘し、唐物の優品「飛青磁」の花瓶が出土し注目を集めました。

整備事業では、傷みが進んでいた西山光照寺跡の石仏覆屋修復工事を開始しました。併せて風化や荒廃が目立っていた大型石仏の修理事業を実施しました。

最後に、事業の遂行にあたり、ご指導・ご鞭撻をいただきました文化庁をはじめ関係各位の皆様とあたたかいご協力をいただきました地元の皆様に対しまして衷心よりお礼申し上げます。

平成10年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 青木 豊 昭

例 言

1. 本書は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が、平成9年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、及び環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、平成18年をメドとした、新たな発掘調査・整備事業「中期10ヵ年計画」の初年度にあたる。本書には、第100次調査の成果及び西山光照寺跡石仏覆屋保存整備工事の概要を収録した。
3. 調査のグリッド設定については、園路によって調査区が斜めに分断される線を境界として、地形及び遺構方位に沿って2方向設定した。
空中写真測量に関しては、座標系第VI系を使用した。
4. 本書の作成にあたっては、資料館員の検討・討議を経て、南洋一郎が編集を担当した。又、執筆については、各項目毎に分担し、文末に文責を記した。

目 次

巻首図版

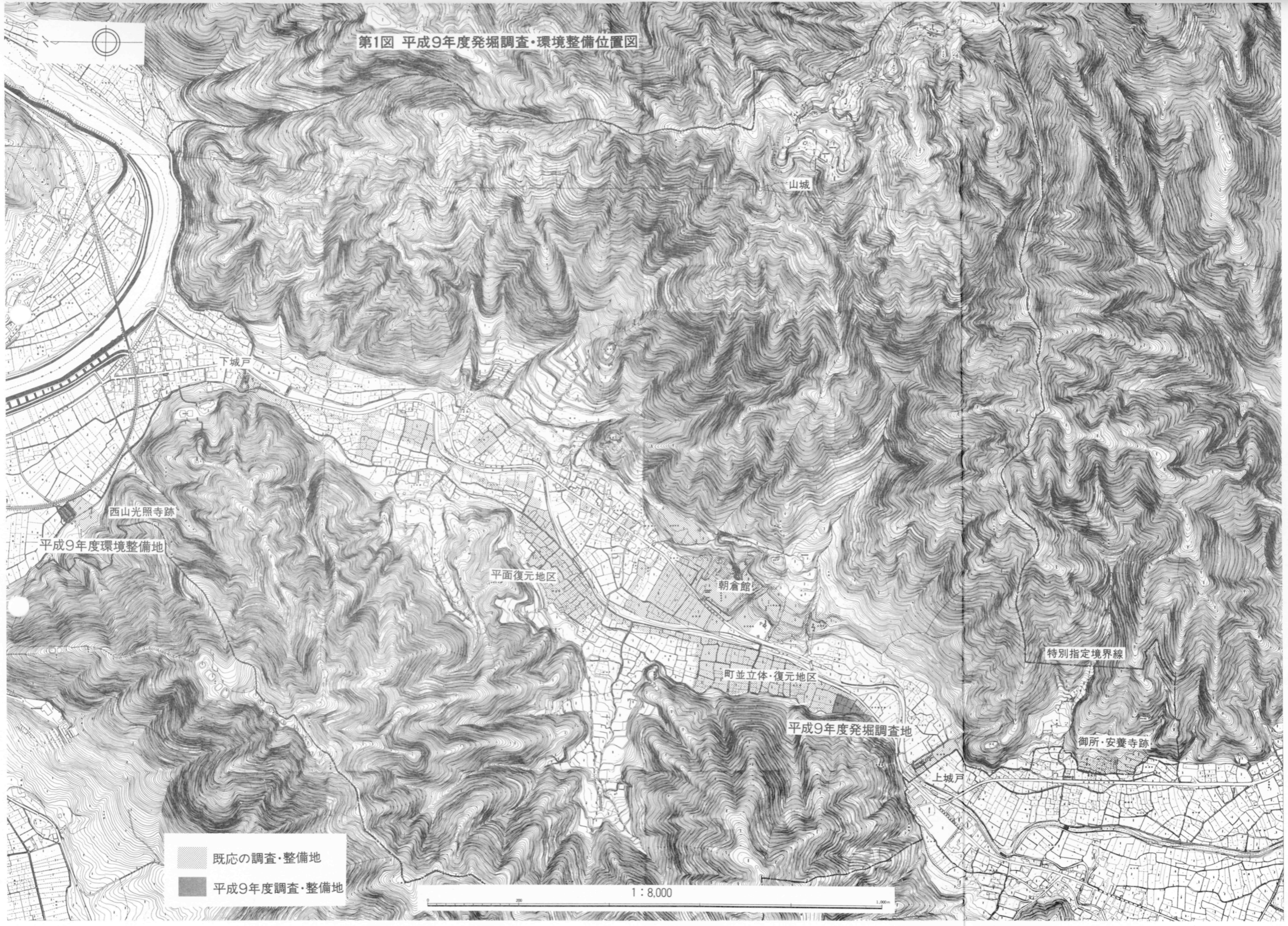
序文

例言

目次

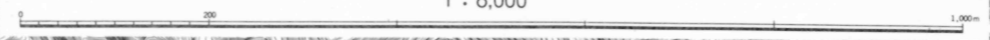
1. 平成9年度の事業概要	3
2. 第100次調査	4
遺構	5
遺物	18
3. 字川合殿に関する古文書調査	25
4. 環境整備	27
西山光照寺跡石仏覆屋保存整備工事	
同 石仏修復工事	
第1表 主要遺構時期別一覧表	17
第2表 第100次調査出土遺物一覧表	18
第3表 石仏修復工事内容表	32
図 版 第100次調査遺構	PL. 1
同 遺物	PL. 7
環境整備	PL. 13

第1図 平成9年度発掘調査・環境整備位置図



- 既応の調査・整備地
- 平成9年度調査・整備地

1 : 8,000



1. 平成9年度の事業概要

本年度は、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘が開始されてから30年目を迎え、又、史跡指定25周年を数える記念の年にあたり、その記念事業の一環として特別展「眠りからさめた戦国の城下町」展を開催した。

発掘調査・整備事業は「町並立体復原事業」が平成7年に完成・オープンし、昨年度をもって調査・整備事業の「中期10ヵ年計画」は終了した。しかし、山城跡、新御殿跡をはじめ調査・整備すべき箇所をまだ残しているため、新たに平成18年をメドとする「中期10ヵ年計画」が上程された。本年度はその初年度にあたる。

発掘調査は第100次調査として、福井市城戸ノ内町字川合殿、藤兵衛川原にまたがる県道沿いの部分、2,600㎡について実施した。調査期間は平成9年4月1日から12月21日までであった。

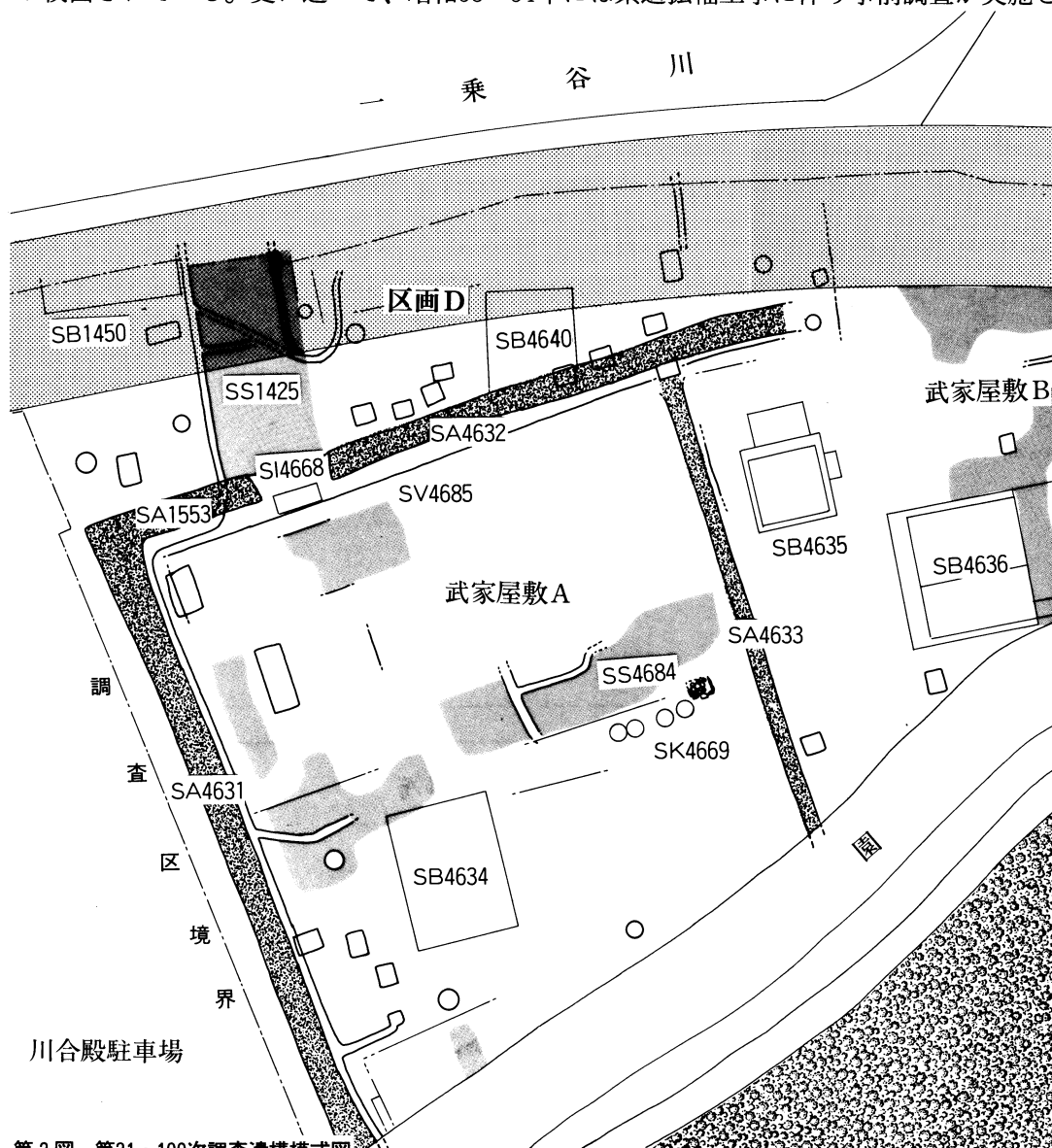
環境整備は、平成6年度に第86・87次調査、平成7年度には第90次調査として実施した、福井市安波賀中島町字西山の西山光照寺跡の調査成果を受けて、環境整備事業に取り組むこととなった。本年度はその第1期工事として、大型石仏群の覆屋3棟分の建て替え工事と、石仏破損の修復及び据え直し工事を実施した。

調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
100次	城戸ノ内町字川合殿、藤兵衛川原	4月1日～12月21日	2,600㎡	計画調査
101次	城戸ノ内町字蛇谷	11月1日～12月21日	400㎡	一乗谷川河川改修に伴う事前調査
環境整備箇所	期間	整備事業内容		
安波賀中島町字西山	平成10年1月16日～3月27日	西山光照寺跡の石仏覆屋修復工事及び大型石仏群の修復工事		
保存処理	期間	事業内容		
	平成10年4月1日～3月31日	木製品450点、鉄製品200点、銅製品500点		

2. 第100次調査

本調査地は、城戸ノ内町字川合殿・藤兵衛川原にまたがる、県道鯖江・美山線に沿った南北に長い調査区で、「町並立体復原地区」仮駐車場（第57・58次調査地）の南隣に位置している。一乗谷川を挟んで東側には字「米津」、「門ノ内」があり、また上城戸の土塁までは200mの至近距離にある。発掘した面積は2,600㎡であった。

北隣の休憩地・仮駐車場では、昭和63年度に第57・58次調査が実施され、山際の広い平坦地において武家屋敷2区画が検出され、川側では町屋と見られる小規模屋敷群がいくつか検出されている。更に遡って、昭和53・54年には県道拡幅工事に伴う事前調査が実施さ



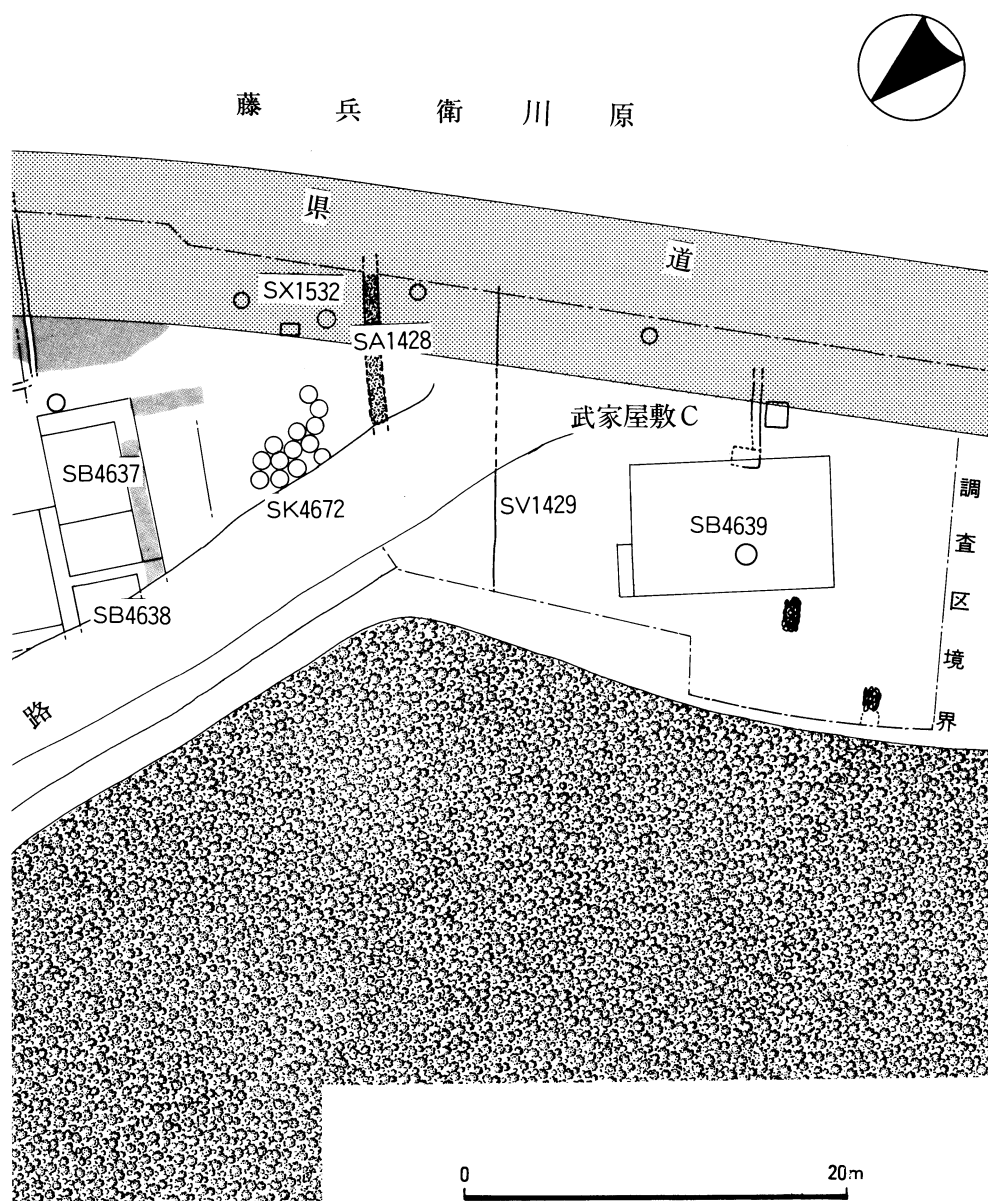
第2図 第31・100次調査遺構模式図

れており、本調査地にあたる範囲の川側旧道路敷部分が第31次調査として発掘されている。そして礎石建物をはじめ、道路、溝、井戸、埋甕遺構などが検出され、山際に向かって城下町の遺構が良好に遺存していることが予測された。

調査は4月1日より開始し、12月21日まで実施した。その間の12月3日には空中写真撮影による遺構測量を行った。

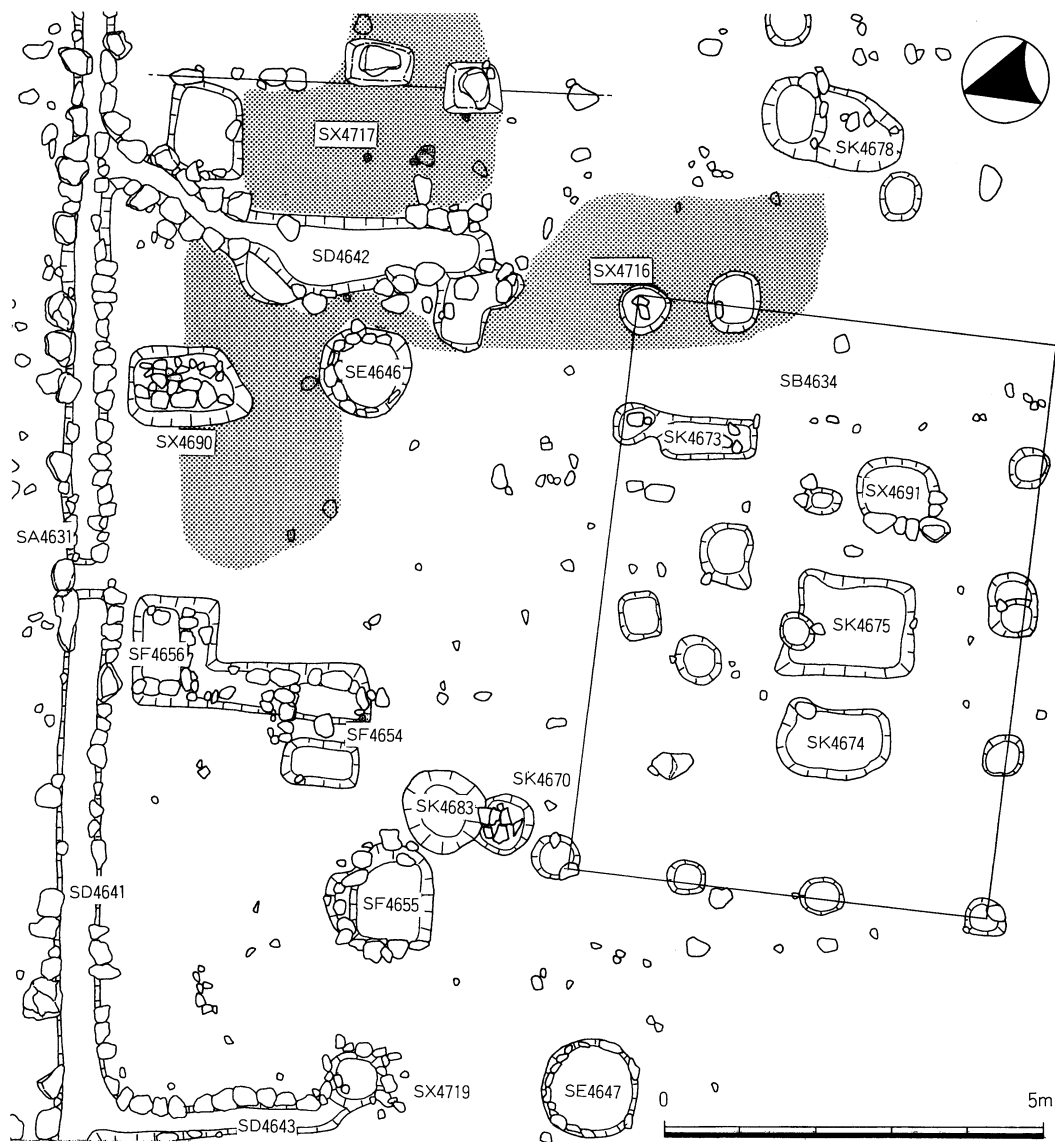
遺 構 (第2～7図、PL.1～6)

本調査において検出された遺構は、土塁4、門1、礎石建物6(土蔵1含)、掘立柱建物1、道路2、溝6、暗渠1、石垣2、井戸7、石積施設13、埋甕遺構2、石敷炉3、ピッ



ト、土壌などであった。

遺構模式図（第2図）で武家屋敷Aとした区画は、東面と北面においてほぼ直角に30mの土塁SA1553・4632,4631があり、更に南側では幅の狭い小土塁SA4633が、武家屋敷Bとを区画するように東西方向に構築されている。東側で門SI4668によって開かれており、第31次調査で検出された道路SS1425と接続していたものと考えられる。屋敷内の建物構造や、配置等については水田の耕作によって削平が進んでおり、明確な遺存状況は把握できない。武家屋敷Cとした区画は、調査区南端の部分である。山裾が迫っており、奥行きは狭くなっている。第31次調査で既に検出されている小土塁SA1428、あるいは石列SV1429によって、北の境界が区切られている。南側は調査区外ということもあって、広がり是不



第3図 第100次調査遺構図(1)

明である。区画Dは武家屋敷Aの川側に隣接しており、小規模屋敷が並ぶところである。道路SS1425によって2区画に分かれる。調査面積も狭く、全体の構成を把握することは困難である。

以下、個別の遺構解説に移る。

武家屋敷A

SA1553・4632 武家屋敷Aの東側を区画する土塁で、第31次調査では川側の一部を検出している。総延長約42m、天端幅約1.5m、基底幅約1.8mを測る。北寄り約8mのところまで門が見られ、道路SS1425に開いている。この土塁には武者走り状のSV4685が内側に見られる。東面石垣が区画Dの遺構面に重なっている事実や、小土塁SA4633との取り付け部分に石積施設SF4663が、この石列を切るように掘り込まれている事実から判断して、石列は下層の区画ラインの可能性はある。また、武家屋敷Bの区画では土塁の軸方位が変更されて「くの字」に曲がり、SA1553・4632を基準にすると、N-5°-E 振れている。

SA4631 北側を区画する土塁で、総延長約38mを検出した。天端幅約1.5m、基底幅約1.8mを測る。内側に溝SD4641が並行して走る。北面の第57次調査地側に面する石垣は幅1m前後の巨石の割石を使用しており、前述の東面土塁の河原石による石垣積みとは全く違う。石垣構築の手法が北側と東側とで明らかに異なる、という点でも両土塁の構築時期に差があることを指摘できる。

SA4633 武家屋敷AとBを区画する小土塁で、総延長約26mを検出した。幅約1m、高さ約0.2mを測る。削平が進んでいるため、石垣が多く抜かれており、基底部分の1石分がかろうじて遺存している状態である。

SB4634 3×4間の掘立柱建物で、棟はほぼ東西方向である。この南側にも礎石が並んでいるものが分散的に確認されることから、隣接して建物が存在したことが考えられる。表土・床土直下で確認され、最終段階まで存在した建物と見られる。柱穴や土壌中には焼土・炭混じりの黄褐色土が充満していた。

SD4641・1439 土塁SA4631, 1553の内側に沿って走り、暗渠SZ1481を潜って道路SS1425に沿って一乗谷川側に延びる溝である。屋敷内の排水用溝である。幅約0.4m、天端石よりの深さ約0.4mを測る。この溝にはSD4642, 4643の溝が北流して取り付く。

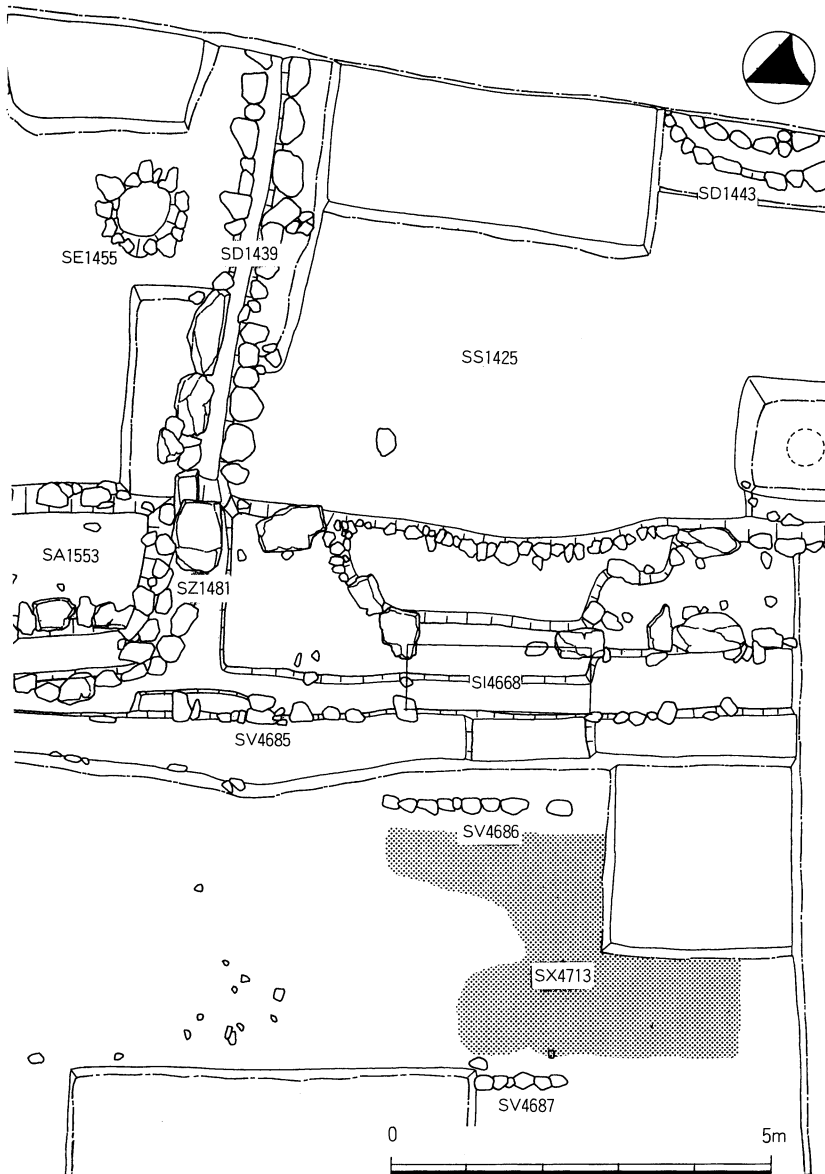
SD4642 SD4641に斜めに取り付く溝で、5m分検出した。幅約0.4m、深さ約0.3mを測る。井戸SE4646との関連性が考えられる。くの字に折れ曲がる。先端部はSB4634のところで側石が乱れており、安定しない。また、溝SD4641との合流部分で一旦遮断されていることから、溝SD4641の構築段階より1時期新しい時期の所産と見られる。

SD4643 溝SD4641に直交して取り付く溝で、3m分検出した。幅約0.4m、深さ約0.2m

を測る。ピットSX4719のところで途切れている。この溝はSD4641と同時期の所産と考えられる。

SD4644 道路SS4684に並行する溝で、4 m検出した。幅約0.4mを測る。南端で折れ曲がり、東側へ延びている。また、北側も別の東西方向の溝と直交するようであるが、攪乱が行われていてよくわからない。最終段階の溝と考えられる。

SE4646 溝SD4642の西側で検出された井戸である。天端石は後世にならされて井戸中へ落ち込んでいたが、周りの遺構面の遺存状況からみて、最終段階まで使用されていたものと考えられる。径は天端で約1.1mを測る。



SE4647 掘立柱建物SB4634の西側で検出された井戸で、径1.25mを測る。天端石やその下の石がかなり落ち込んでいた。

SE4648 掘立柱建物SB4634の南側で検出された井戸で、径1.1mを測る。

SF4652 門SI4668の西側約8mのところで検出された石積施設である。1.6×3.7mを測る。比較的長大な石積施設で、削平、攪乱のためか南側石列がほとんど飛ばされていた。北側も天端石が飛ばされているようである。内部や底面には炭混じり焼土が充満し、

第4図 第100次調査遺構図(2)

最終段階の遺構であることが考えられる。また、底面に石列が見られ、作り替えによる下層遺構の存在が考えられる。

SF4653 土塁SA4631,1553の東北コーナーで検出された石積施設で、1.6×2.7mを測る。石積みは段を設けて2段積みとしており、深さは約0.7mを測る。

SF4654 掘立柱建物SB4632の北側で検出された石積施設で、焼土が充満していた。最終段階の遺構と考えられる。0.9×1.3mを測る。西側の側石は攪乱によって抜き取られたものか、遺存度は良くない。

SF4655 SF4654のすぐ西側で検出された下層の石積施設で、規模も殆ど同規模である。南側の側石は抜き取られたものか、残っていない。

SF4656 SF4654の北側で検出された下層の石積施設で、溝SD4641によって切られている。完掘できず、規模は不明である。

SI4668 土塁SA1553とSA4632に設置された門で、礎石間の柱間寸法は卦搔きの刻線によって、242.8cmの数値が得られた。

SK4669 屋敷内中央、西寄りの道路状遺構SS4684に沿うかたちで検出された埋甕遺構、いわゆるカメピットである。発掘では2基検出できたが、プランが不明確のために検出には至らなかったものの、まだ数基存在するかも知れない。埋設されていた甕は口縁部が肥厚するIV群Cの形態を呈し、最終段階の遺構と考えてよい。

SS4684 屋敷中央部分で、溝SD4644とともに検出された溝である。約9m分を発掘した。土塁SA4633のほうに延びているようであるが、途中で砂利敷が不鮮明となり断定できない。

SV4685 既に前項の土塁SA1553,4632のところでも述べたとおりであるが、武者走り状に南北に土塁に並行する石垣遺構で、武家屋敷Bの井戸SE1458まで延びる。3ないし4石積まれている。門に並行する石列SV4686や、石積施設SF4653の検出面から見てわずかにレベルが低く、土塁より先行する遺構と考えられる。

SX4695 石敷炉跡と見られる方形の石組遺構である。北壁部分で石組が抜かれていて、遺存度は良くないが、約0.9×1.2mを測る。焼土、炭が充満していた。石組の内面は赤変している。

SX4713・4714・4715 屋敷北東部寄り、石積施設SF4652の周囲に広がる砂利敷で、同一レベルで検出されていることもあって、同じ砂利敷面と考えられる。

SX4716 井戸SE4646の周囲に広がる砂利敷で、掘立柱建物SB4634に向かって延びる。溝SD4632と同時期の所産と考えられる。

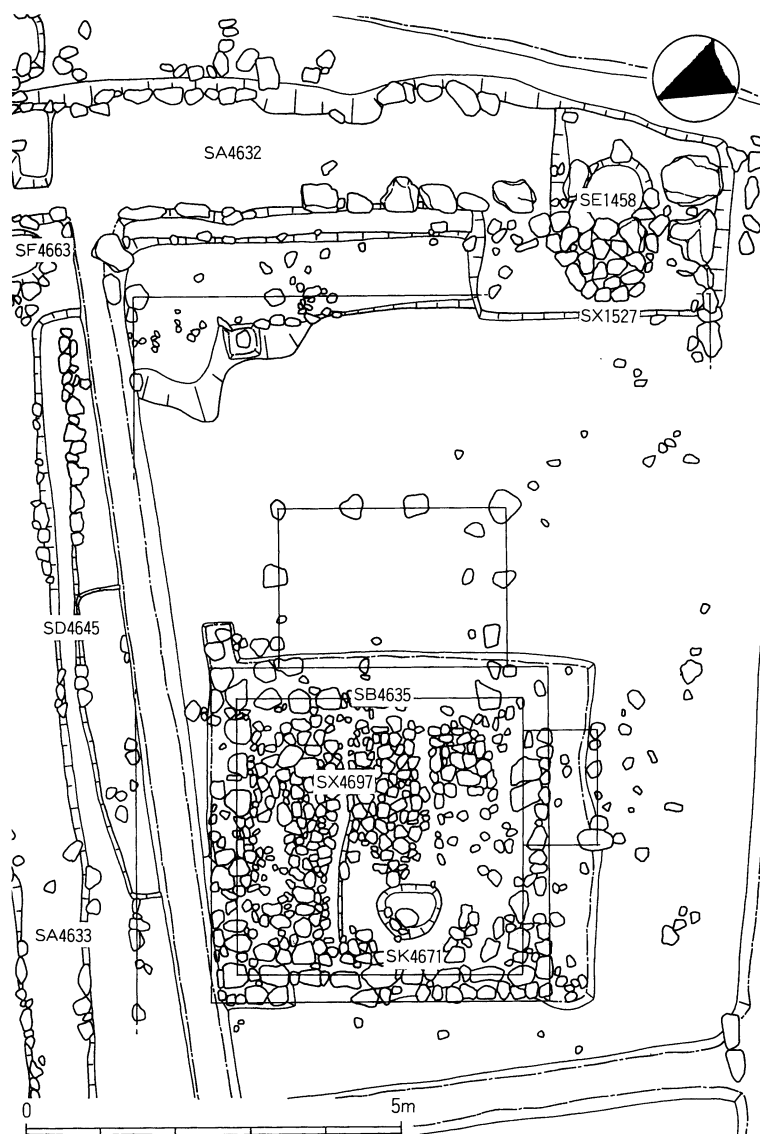
SZ1481 第31次調査で検出されている暗渠で、溝底には偏平な河原石による貼石が見ら

れる。

武家屋敷B

SB4635 床土下、小砂利を多く含む層より検出された石敷の礎石建物で、いわゆる土蔵と考えられる建物である。棟方向は南北と考えられ、 4.7×4.7 mのほぼ方形の建物である。東側に 2×2.5 間の庇廂が取り付くようである。この土蔵と考えられる建物の方位は、「くの字」に折れ曲がる土塁SA4632の南端部と方位が同じであり、同時期の所産と考えられる。

SB4636 床土下より検出された礎石建物で、次項で述べる礎石建物SB4637が隣接する。棟方向は東西と考えられ、 6.8×7.6 mの規模を有する。これに南側に張り出して、 $3.9 \times$



6.2 mの建物が取り付く。

東南コーナーから、南側にかけて砂利面が見られ、幅は $1.5 \sim 2.0$ mで通路状を呈する。この建物の東南、及び北西部には石積施設SF4666、SF4665がある。

SB4637 SB4636に隣接する礎石建物で、棟方向は東西と考えられる。 4.9×8.6 mの規模を有する。南辺は幅 0.7 m、長さ 6.5 mの砂利面があり、通路部分と考えられる。北東コーナーには井戸SE4649が取り付く。

SB4638 礎石建物SB4637に接して西側に広がる礎石建物で、主要部分は山裾の園路下になって、調査すること

第5図 第100次調査遺構図(3)

ができず、正確な規模は不明である。検出された規模は南北3.5m、東西2.0mを測る。

以上の3つの建物は、いずれも遺存度良好で一面に焼土混じりの褐色土の被覆が見られ、滅亡・廃絶直後に埋め立てられた状態と判断される。礎石数カ所に卦搔きによる柱位置の刻線が見られる。

SD4645 土壘SA4633に並行する溝で、ほぼ6.5m分を検出した。土壘SA4632下に延びて行くものと見られる。

SD1445・1446 第31次調査で検出されている溝で、それぞれが直交する。いずれも2.5mほど検出したが、延長部分は不明である。幅0.2m、深さ0.15mを測る。この溝には砂利敷遺構SX4710が伴う。

SE1458 第31次調査で検出されている井戸で、石敷SX1527を伴う。径0.8mを測る。明らかに土壘SA4632と切り合っており、井戸の時期が一時期古い。従って、土壘SA4632が構築される前にこの井戸及び石敷面と対応する土蔵SB4635や石積施設SF4663が同時に機能した時期を設定することが可能となる。

SE4649 礎石建物SB4637に付設された井戸で、天端石も残り、遺存度は良好である。径約0.7mを測る。

SF4663 土壘SA4632と小土壘SA4633の直交する部分に掘られた石積施設で、これも明らかに小土壘SA4633と切り合っており、石積施設が新しい。しかしながら、この石積施設は、東側半分が土壘SA4633の下に延びていくものと見られ、ある時期に半分に規模縮小されたか、廃棄された可能性が考えられる。0.7×1.1mを測る。

SF4664 土壘SA4633の西端南側で検出された石積施設で、0.9×1.1mを測る。天端が削平された痕跡が見られ、この周辺一帯が砂利層で、遺構の遺存度が良くないことと合わせて考えると、後世に何等かの攪乱・削平が行われた結果と考えられる。

SF4665 礎石建物SB4636の北西コーナーに位置する石積施設で、西側の側石は攪乱を受けたものか、抜かれた状態で残りは良くない。推定で0.9×1.2mを測る。

SF4666 礎石建物SB4636の東南部に位置する石積施設で、0.7×0.9mを測る。

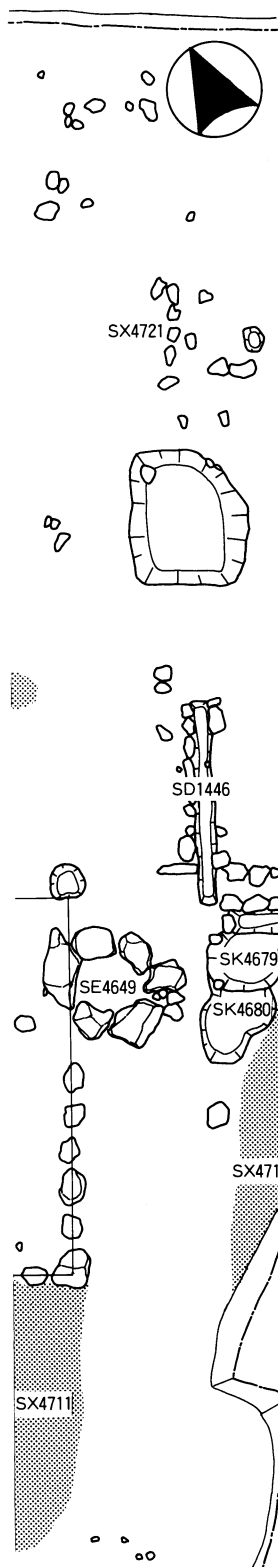
SK4671 礎石建物SB4635の中央部西寄りで検出された埋甕遺構で、甕胴部破片がまとまって出土している。

SK4672 武家屋敷B南端において検出された埋甕遺構で、計12基検出された。そのうち3基には甕が据わっており、他は抜き取られたり、攪乱によってピット内に落ち込んでいた。また、これらのピット内に搔き集められていた覆土中から「飛青磁瓶」が出土して注目された。

SX4697 礎石建物SB4635に敷き詰められた石敷で、中央部には東西方向に転ばし根太の



第6図 第100次調査遺構図(4)



痕跡と見られる溝状の落込みが認められる。カワラケ等の遺物を含む砂利層が上面に被っており、ある時期にこの砂利層によって整地された可能性が考えられる。

SX4699 礎石建物SB4636の北西コーナー部において検出された石敷である。

SX4708・4709・4710 いずれも礎石建物SB4636, 4637に伴う砂利敷遺構で、小砂利が均一に良好な状態で検出された。

武家屋敷C

SA1428 第31次調査で検出された小土塁で、幅8mを測る。埋甕遺構SK4672の南側で東西に延びていたものと見られる。本調査区においては、攪乱を受けたものか石垣列は見られず、不明であった。

SB4639 屋敷内の中央部に位置する礎石建物で、床土下の層より検出された。棟は南北方向と考えられ、東側は礎石列がはっきりしないものの、規模はおおよそ10.7×7mを測る。北西コーナーに2.8×0.7mの張り出しが取り付く。

SE4650 屋敷内中央の表土・床土下で検出された井戸で、径約1.0mを測る。最終段階の井戸である。

SV1429 第31次調査で検出されている石垣で、本調査区でも5m分を発掘した。まだ西側山裾に連続していくものと考えられる。武家屋敷Cはこの石垣及び小土塁SA1428とによって区画される。石垣列と小土塁はほぼ平行しており、幅は約4～5mである。東西道路であった可能性も考えられる。

SV4689 礎石建物SB4639の西側で検出された石列で、南北に直線的に延びる。2m分を発掘した。この石列付近で弥生～古墳時代初頭の「硬玉製の勾玉」が出土した。調査区内に古墳ないしは墳丘墓が存在したとは考えにくく、朝倉氏の時代に一乗谷付近から持ち込まれたものと想像される。

SX4706 井戸SE4650と同じ床土下で検出された石敷炉跡で、炭・焼土が炉内に堆積していた。幅約0.9m、長さ約1.8mを測る。

SX4707 調査区最南端山裾で検出された石敷炉跡で、縁石が

一部抜かれているものの、ほぼ全形が検出できた。幅約0.8m、長さ約1.2mを測る。この炉跡は更に西側にプランが延びていくようで、調査区境界で炭溜りの堆積断面を確認している。灰溜めの土壌が併設しているものと考えられる。

区画D

SB4640 建物の規模はほとんど不明ながら、土塁SA4632に接し、一部は重なるような状態で検出された。明らかに土塁SA4632の構築以前の時期のものと思われる。

SD1439 道路SS1425に沿って東西に延びる溝で、一乗谷川の川沿いまで延びて、南北幹線道路に直交するものと考えられる。

SD1443 第31次調査で検出されている溝で、SS1425を斜めに横断しSD1439に合流している。

SE1455・4651 区画Dは南北に2つの屋敷に分かれているが、そのうちの北側の屋敷に属する井戸で、SE1455は第31次調査で検出されており、径0.75mを測る。SE4651は本調査において検出され、短径0.8m、長径1.2mを測る。

SF4657 第31次調査で検出されていた石積施設である。1.0×1.6mを測る。

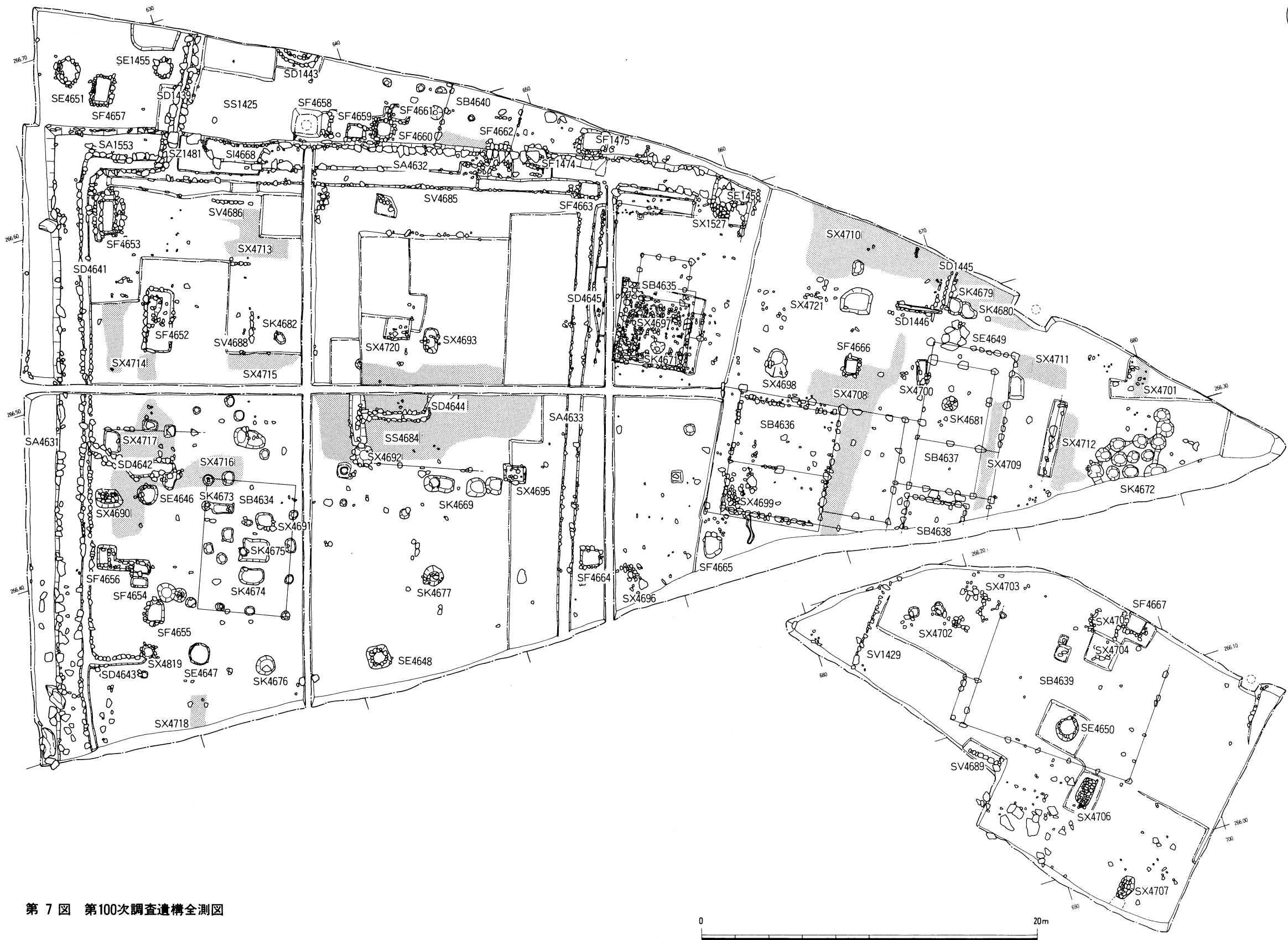
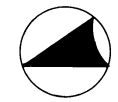
SF4658・4659・4660・4661 南側の屋敷に属する石積施設で、本調査によって新たに検出された。SF4658は北壁部分が後世の電柱埋設のために攪乱を受けている。東西幅約1.1mを測る。SF4659は土塁に並行して接するように設置されている。ほぼ正方形を呈し、1辺約0.9mを測る。SF4660は方位をズラして設置しており、おおよそN-10°-Wの振れが見られる。ほぼ方形で、1辺約1.0mを測る。SF4661はSF4660と一部切り合うように設置されており、検出状況からはSF4661が一時期古い。0.9×1.1mを測る。

SF4662・1474 土塁SA4632と方向を同じくしており、土塁下から検出された。SF4662は攪乱が激しく、側石の多くが崩されて土塁裏込め石に転用された状態を呈していた。SF1474は土塁に重なる西壁部分が比較的良好に遺存しており、東壁部分の天端石より2ないし3石分レベルが高く積まれていることが判明した。このことにより、土塁SA4632の構築以前にも南北方向にこの石積施設SF1474西壁を境とする段差が設けられていたことが推測される。

SF1475 第31次調査で検出された石積施設で、1.1×1.6mを測る。

SS1425 門SI4668より川側に向かって延びる道路で、第31次調査で検出されている。幅は4.5mを測る。溝SD1442, 1443の存在によって2時期以上使用されたことが判明している。

(南 洋一郎)



第 7 図 第100次調査遺構全測図

区画図	遺構名	時期別分類			備考	区画図	遺構名	時期別分類			備考
		I期	II期	III期				I期	II期	III期	
武家屋敷A	SA4631	○				武家屋敷C	SV1429	○			
	SZ1418	○					SX4706,4707	○			
	SF4654	○					SA1428	○	○		
	SF4655	○					SE4650	○	○		
	SI4668	○					SB4639		○		
	SK4669	○					区画D	SD1443	○		
	SS4684	○				SE1445		○			
	SX4695	○				SE4651		○			
	SB4634	○				SF4657		○			
	SD4642,4643	○				SF4658,4659		○			
	SD4644	○				SF1475		○			
	SE4646	○				SD1439		○	○		
	SE4648	○				SS1425		○	○		
	SA1553,4632	○	○			SF4660			○		
	SD4641,1439	○	○			SB4640				○	
	SF4652	○	○			SF4661				○	
	SF4653	○	○			SF4662,1474				○	
	SE4647		○								
	SX4713,4714,4715		○								
	SF4656		○	○							
SA4633			○								
SV4685			○								
武家屋敷B	SB4636,4637,4638	○									
	SD1445,1446	○									
	SE4649	○									
	SF4665	○									
	SF4666	○									
	SK4672	○									
	SX4699	○									
	SX4708,4709,4710	○									
	SX4697	○	○								
	SD4645		○								
	SE1458		○								
	SF4663		○								
	SB4635		○								
	SF4664		○								

第1表 主要遺構時期別一覧表

遺物

第100次調査で出土した遺物の総数は14,563点にのぼる。その内訳は、第2表のとおりで、土師質皿が約50%、越前焼が30%、中国製陶磁器が8%、瀬戸・美濃製品が5%、金属製品が5%、石製品も5%で、ほぼ一乗谷の遺物の出土状況と類似する。やや越前焼甕の割合が高いが、これは武家屋敷Bに越前焼甕の埋甕遺構があったためである。

以下、各屋敷単位また遺構面ごとに記述する。

武家屋敷A 上層（遺構I期）

越前焼 1, 2は体部に突帯があり口縁が短い越前焼甕である。2点ともやや焼きが甘い。このタイプの甕は15世紀後半頃に多い。

瀬戸美濃焼 3はいわゆる天目茶碗で、腰部はシブ鉄が塗られている。体部が直線的なことから16世紀後半の時期に比定される。4は体部が膨らむ鉄釉香炉の口縁部である。釉調は黒いが体部は何らかの理由でかせている。5・6は口縁部が大きく開く鉄釉の花瓶で、頸部には轆轤による凹線が数本はいる。釉調はやや薄く天目茶碗に見られる鉄釉とシブ鉄の中間的な様相を呈する。7・8は鉄釉の葉茶壺の体部で、釉はまだらで筆で塗ったようである。

種別	器種	数量	割合	種別	器種	数量	割合	種別	器種	数量	割合
越前	甕	4,139		青磁	碗	128		金属	銅銭	61	
	壺	384			皿	144			銅製品	4	
	鉢	157			鉢・盤	24			釘	367	
	播鉢	386			香炉	6			火箸	1	
	その他	21			花瓶	24			鎌	1	
小計	5,087	35.36%	その他	4		武器	6				
土師質	皿	7,129		小計	330	2.29%	その他	62			
	羽釜	12		白磁	碗	5		小計	502	3.49%	
	その他	8			皿	400		石製品	バンドコ	90	
小計	7,149	49.69%	坏		11		風炉	17			
瀬戸美濃	鉄釉碗	71		その他	2		炉	2			
	皿	2		小計	418	2.91%	硯	20			
	壺	67		染付	碗	52		砥石	14		
	花瓶	20			皿	333		臼	2		
	その他	17			坏	26		盤	44		
	小計	177		その他	2		その他	42			
	灰釉碗	10		小計	413	2.87%	小計	231	1.61%		
皿	63		褐釉	壺	12		木製品	炭	24		
鉢	10			小計	12			漆器	5		
香炉	7			計	1,173	8.15%		その他	5		
その他	15		朝鮮製陶磁器	碗	16		小計	34	0.24%		
小計	105			皿	1		その他	36			
計	282	1.96%		壺	8						
瓦質	風炉	5		その他	2						
	羽釜	9		小計	27	0.19%					
	その他	13		合計	1,200	8.34%	総合計	14,563	100.00%		
小計	27	0.19%									
国産		3									
	その他	12									
	小計	15									
合計		12,560	86.08%								

第2表 第100次調査出土遺物一覧表

9・10は灰釉碗の底部で、高台部は付け高台で高台内にはトチンのあとがある。

11・12は灰釉の端反皿で、いずれも見込みに灰釉が厚くたまり、カタバミの印花がある。高台は付け高台で碗と同様見込みにはトチンの跡がある。13は直径が3 cmほどの坏である。これほど小さいが付け高台となっている。14・15は、灰釉の四耳壺でおそらく同一個体であろう。

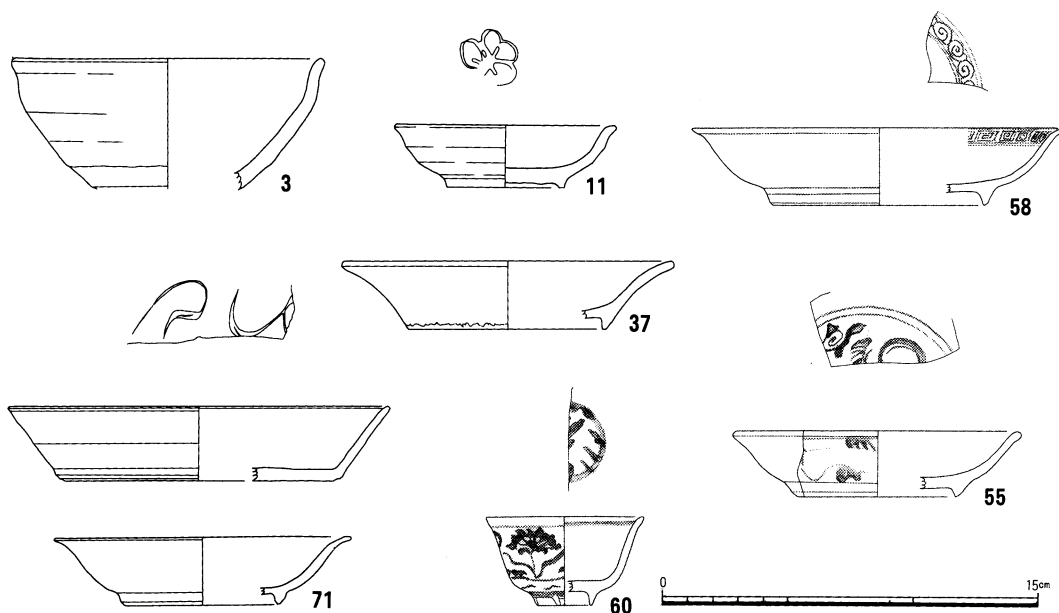
中国製陶磁器

16～19までは青磁碗である。16はややはっきりしないが鎬蓮弁文碗、17は無文の碗で高台内部まで釉が施されており、高台の畳付の部分だけ釉が削り取られ露胎となっている。18は端反りの碗で作りが薄く釉色も薄い。19は線刻の蓮弁文碗である。

20～24は青磁皿である。20・21は輪花の皿で作りは薄い。20は21に比べて花卉がやや大きい。22は稜花皿で、釉調はやや透明がかっている。23・24は作りが厚く見込みに印花がある。見込みの部分が露胎となって茶色を呈するが、意識的に鉄釉を施したようである。高台の畳付まで釉が施されているが、高台裏は露胎である。この2点の他に3個体ほど割合まとまった地区から出土しており、5個体セットとして所蔵されていたと推定される。

25は高台裏まで施釉された皿で、26は盤である。

27～40は白磁皿である。27～30は、作りが薄く底部が少し内返り気味となり、口縁部が口禿である点に特徴がある。見込みにはへら描の文様があり、釉調は乳白色を呈し細かい貫入がある。この種の皿は、一乗谷では白磁端反皿に比べれば少なく、出土状況も第51次調査でまとまって出土したのを除けば、小片が出土しているだけであった。そのため14世紀頃の口禿皿と推定していた。しかし、少量ながら各調査地点から出土していることから、



第8図 第100次調査 武家屋敷A出土遺物

あるいは考えているより新しい時期のものである可能性も出てきた。31～34はいわゆる白磁端反皿で、白磁皿の大半を占める。口径は12cm前後のものが多いが、33はおそらく口径が20cm近い大きさであろう。32は純白に近いが、わずかに灰色がかかるものが多く34は灰色を呈する。35は小型の内湾する皿で、36は釉調が灰色に近い内湾する皿である。37・38は高台部からそのまま外反する皿である。39は艶のない灰色をしている。40は輪花の白磁皿で、41は白磁坏である。

42～48は染付碗である。42～44は牡丹唐草文の碗で、43は文様が退化して蔓の部分がかほとんど描かれていない。45は口縁下に渦巻文が巡る宝相華唐草文碗である。46は文様を描くときの筆使いや釉調から景德鎮系とは異なる地区で焼かれたものと推定される。47は腰部に唐草文が巡るタイプで底部が広い。48は蔓草文の碗で輪郭を描いて中を薄い呉須で塗っている。

49～51は外面が密に展開する唐草文、見込みが玉取り獅子文の端反り皿である。52は同じ文様の碁笥底の皿で見込みは褐磨文である。53は同じく碁笥底の皿であるが、見込みが草花文となっている。54・55は宝相華唐草文の端反皿で、見込みはいわゆる十字花文のものが多いが56は褐磨文となっている。57は染付皿底部の裏で銅のようなものが融着している。58・59は口縁部内側に雷文帯があり、見込み周囲には渦巻き文、中央には蟹の文様が描かれる。この種の皿は一乗谷では出土例が少なく、最末期に輸入されたものと推定される。60は草花文の坏で今回この種の坏がまとまって出土した。

朝鮮半島製の陶磁器

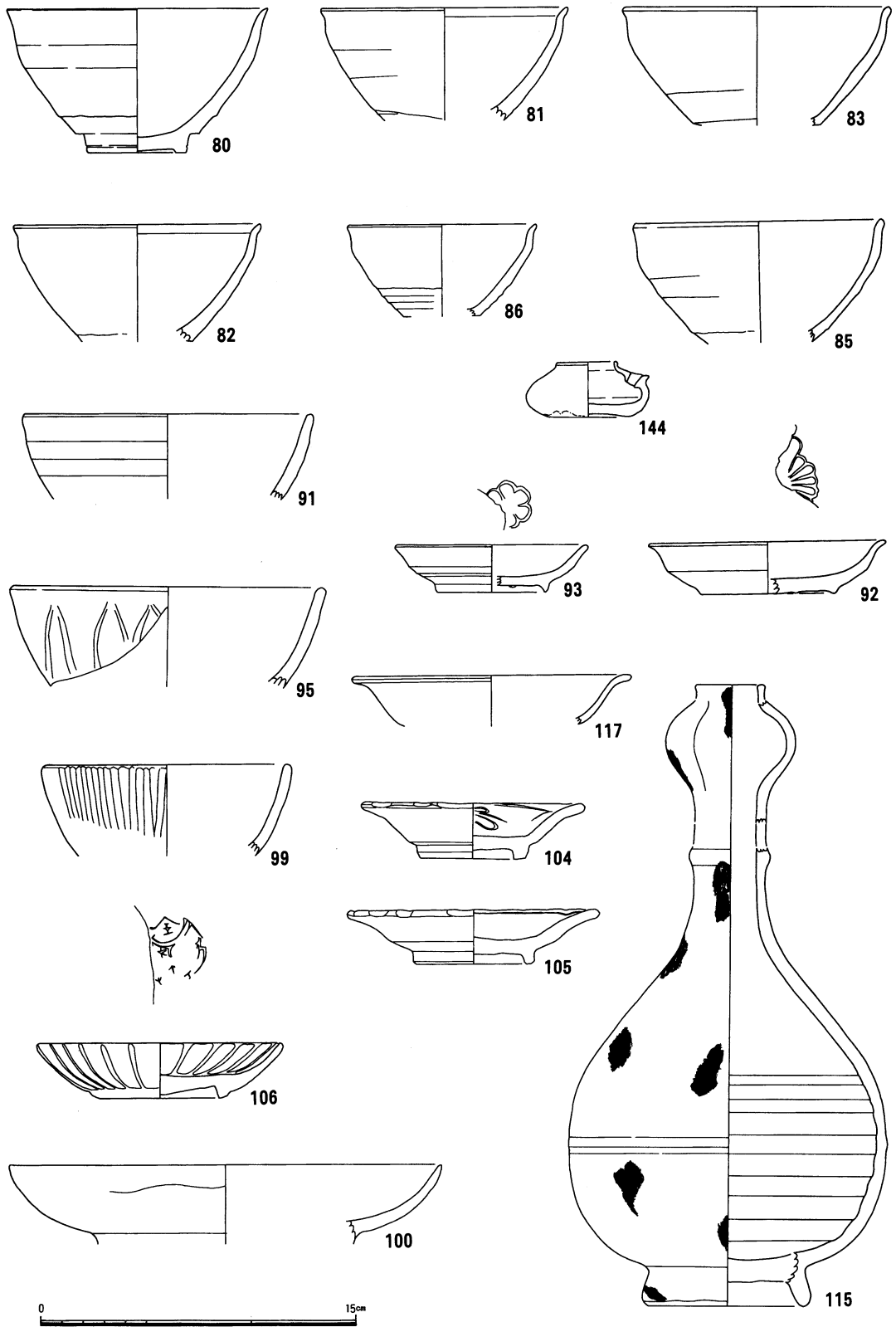
60～62は朝鮮半島製の陶磁器で60・61はいわゆるソバ茶碗である。畳付に砂トチンの跡があり、おそらく同一個体であろう。63は白磁の碗で柔らかい乳白色の釉が施されている。

武家屋敷A 下層（遺構Ⅱ・Ⅲ期）

下層は、遺構のところでも述べたとおり、東側の土塀改変以前の遺構面とその上の整地層から出土した遺物である。調査した面積が狭く整地層からの遺物も少なかった。

瀬戸美濃製品 64は天目茶碗で、65は鉄釉の葉茶壺であろう。釉調から上層で出土した4・5と同一個体の可能性が高い。66は口縁部が大きく開く鉄釉の仏華瓶である。頸部に三本の沈線がある。67は口縁部にのみ灰釉が施されたいわゆる緑釉皿である。68は灰釉の四耳壺でしっかりした高台がつく。体部はヘラ削りのあとが顕著である。

中国製陶磁器 69は無文の青磁碗である。釉は半透明で畳付と高台裏は露胎となっている。70は獣足をもつ青磁盤の脚部である。71は口径12cm程の白磁皿である。72は草花文の染付碗で、呉須の色が鮮やかで一乗谷では後期に属するタイプである。73は腰部に芭蕉葉文が巡る染付碗で、72とは逆に古いタイプの碗である。74～76は外面に唐草文が密に展開す



第9図 第100次調査 武家屋敷B出土遺物(1)

る端反皿で74の見込みは褐磨文となっている。77は赤絵の碗で口縁部が外反せず、胎土が白いことから新しいタイプと考えられる。

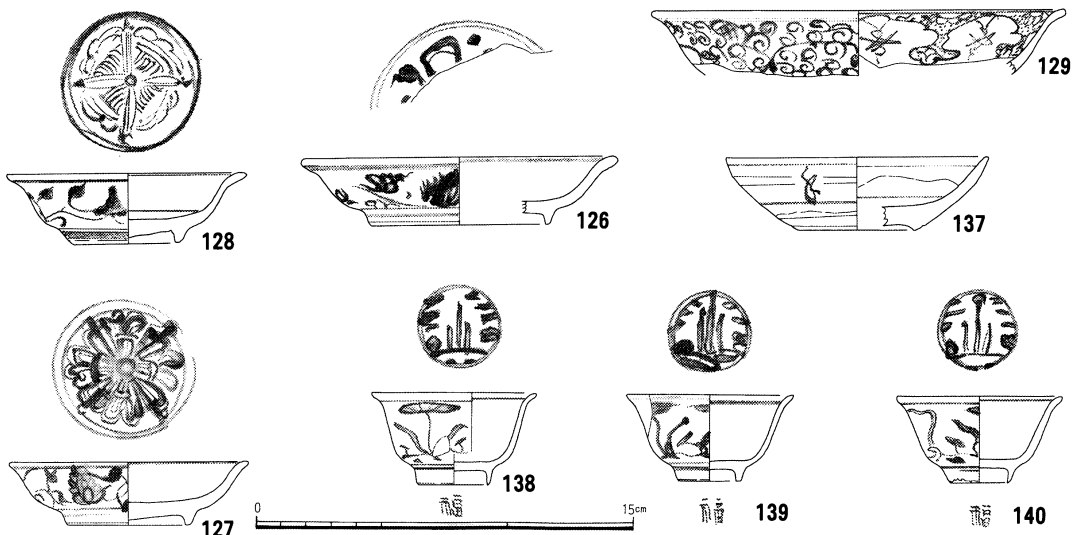
武家屋敷B 上層（遺構I期）

越前焼 78は口頸部が立ち上がる中型の壺で、肩部に傘の窯印がある。79は播鉢で、全面に播目があり、それが口縁部下の沈線を越えているところからⅢ群でももっとも新しいタイプである。

瀬戸美濃製品 80～86までは天目茶碗で体部は直線的なものが多い。80は腰から高台裏までしっかりとシブ鉄がほどこされているが、83はシブ鉄が薄い。87は鉄釉の平茶碗で、腰部から口縁まで直線的に開く。88は碁笥底の鉄釉皿である。一乗谷では鉄釉皿の出土例ははなはだ少ない。89は鉄釉の徳利で、体部が丸い。体部が直線的なものもある。90は鉄釉の仏華瓶で、口縁部が大きく開き、凹線のある頸部には長方形の耳がつく。体部は肩が大きく張って水平になる。瀬戸の昔田窯で出土しており、これもほぼ同時期の15世紀末の所産であろう。武家屋敷Aでも出土しているが、両屋敷の境界あたりで出土し、破片が接合しているところから本来は武家屋敷Bの下層にあったものであろう。

91は無文の灰釉茶碗で、体部に轆轤成形の跡が残る。92・93は灰釉皿でいずれも直径が10cm程の小型である。見込みにはカタバミの印花があり、口縁部の外反が小さく、丸皿になる直前の形態をしている。94は、灰釉香炉である。釉が体部の中央付近までかかり、底部には3足の脚がつく。

中国製陶磁器 96～99は青磁碗である。96は無文碗で体部に焼成時に隣の碗と融着した跡がある。これらの青磁碗類が量産品として大量に日本に輸入されたことがわかる。97は幅の広いへらで溝を作り蓮弁をあらわしている。98・99は線刻の蓮弁文碗である。100～109



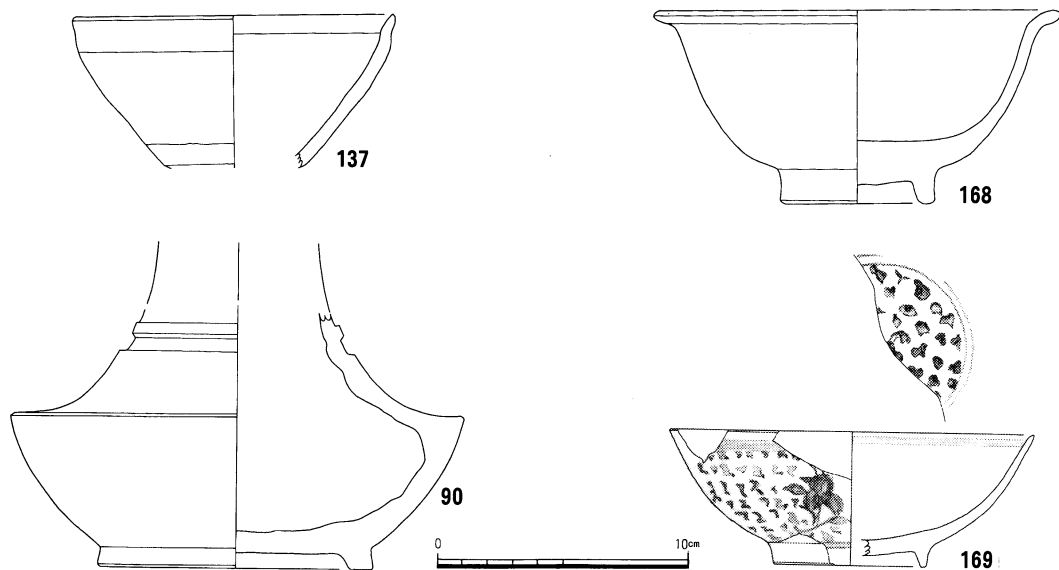
第10図 第100次調査 武家屋敷B出土遺物(2)

は青磁皿である。98～100は輪花皿で、作りは薄く6弁の花びらを持つ。102は稜花皿で、見込みには双魚文のレリーフがある。104・105も稜花皿で、見込みには草花文のスタンプがある。作りは厚く、釉調はくすんだ緑色で高台裏は釉が削り取られている。106も輪花皿である。ヘラで花卉を削りだしている。107はその外面である。109も輪花皿、108はその高台裏で白磁となっている。110は見込みに片刃切りの草花文を持つ大皿である。111～114は香炉である。

115は飛青磁瓶で、15年前の調査で一部が出土していた。青磁の発色もよく、なかなかの良品である。

116～120は白磁皿である。117は端反皿であるが、胎土が灰色である。118は高台が厚く畳付の釉を削り取っている。117などより一時期古いものと推定している。120は、浅く口縁部がわずかに内湾する皿で桜高台となっているものもある。121は、白磁坏で見込みが蛇の目状に釉が掻き取られている。

122～124は染付碗で、122は蓮子の碗で見込みには巻貝の文様があり、腰には芭蕉葉文が巡る。123は饅頭心の碗で、見込み、外面に牡丹唐草文が描かれる。124は腰部に波濤文の崩れた文様が巡る。高台がやや開き気味となっていることから、時期的に新しいものと推定される。125～137は染付皿である。129・130は唐草文が密に展開する皿で、口縁部内側に四方禳文が巡る。この種の皿は、四方禳がない皿に比べて出土例が少ない。131は外側の文様と同じであるが、口縁部が内湾する。125～127は外側の文様が宝相華唐草文、見込みが褐磨文の皿で、一乗谷ではもっとも出土数が多い。132・133は碁笥底の皿で、132は見込み中央に粘土で作った小さい魚を釉のうゑに置いて焼いたもので、その周り4カ所



第11図 第100次調査 武家屋敷B(左) 武家屋敷C(右) 出土遺物

に草花文がある。133は見込み中央に草花文がある。両方とも外面腰部には芭蕉葉文が巡る。137も碁笥底であるが、見込みは、釉が施されていない。釉調もかなりくすんでいるところから漳州窯系の製品と推定される。134は口縁部が外に折れて広がり、体部には丸鑿による縦方向の刻みが巡る皿で、一乗谷の終わり頃輸入されたものと推定される。135・136は見込みが蟹の文様の皿である。138・139は染付坏で外側は草花文、見込みは太古石が描かれている。

武家屋敷B 下層（遺構Ⅱ・Ⅲ期）

歳がある遺構面とその整地層から出土した遺物群である。

瀬戸・美濃製品 141～143は天目茶碗で口縁部下から体部にかけて丸みがあり、16世紀初め頃に比定される製品である。144は高さ2.5cmほどの水滴で、底部は露胎で回転糸切りの跡が残る。

145・146は灰釉の碗で145は天目茶碗の形をしている。147は緑釉皿、148は折れ縁鉢の底部である。これらは15世紀中頃に生産の中心がある製品である。

中国製陶磁器 149～152は青磁碗である。149・150は無文で浅いタイプの碗である。151・152は高台径が大きいタイプの青磁碗で、高台裏の釉を軽くふき取ってあり、融着しないためのトチンの跡がある。154は花瓶の耳である。155・156は質的には端反り白磁皿と同じであるが、口縁部が内湾するタイプで一乗谷での出土例は多くない。157は外面が細かい唐草文の染付碗で、158は口縁部に波濤文が巡る碗である。159は見込みが玉取り獅子の皿で、160は外面に唐草文が描かれるが、内湾するタイプの皿である。161・162は中国製の天目茶碗で胎土は茶色くやや荒い。釉が二重掛けのように見える。

163は、褐釉の壺で内側には轆轤成形の跡が残る。釉が全体に施されず、一部は露胎となっている。

朝鮮半島製の陶磁器 164・165はいわゆるソバ茶碗である。167は焼き締め壺である。胎土は赤くよく焼き締まっている。

武家屋敷C

この地区からの遺物の出土量は少ない。168は口径が16cm程の端反り青磁碗で、高台径が小さく畳付まで施釉してある。169は、「数字の2」のような文様が並んでいるが、一部牡丹が描かれていることから、この文様は牡丹唐草文が変化したものとわかる。

170は、直径が4cm程の笏谷石製の球で、上部に直径・深さとも5mm程の穴が穿たれている。用途は不明ながら、錐の重りではないかと推測している。

171は硬玉製の勾玉で、穴は両側からあけられている。硬玉の質はよい。(岩田 隆)

3. 字川合殿に関する古文書調査

今回の第100次調査地は旧足羽郡城戸ノ内村の28字川合殿に位置している。この付近には齊藤・平井・川合殿という地字（ちあざ）が並んでいる。そしてそれらはそこに屋敷を構えた朝倉氏の家臣の名に由来するものとみられている。また安波賀春日神社蔵「一乗谷絵図」（通称古絵図）にもこの付近の山際に「山崎長門守跡」「斎藤兵部大輔跡」「鰐淵将監跡」「朝倉角三吾跡」「河合安芸守跡」などの記載があり、それらは各武将の屋敷地の位置を比定したものとみられる。これらの地名や比定は正確には幕末ころまでの伝承によるものというべきであろうが、朝倉時代の実体の一部を反映していることは大いに考えられる。ただすでに指摘されているように、各地字の大きさは出土した屋敷地数個分にあたるので、その地字の場所の一部分にそうした人物の屋敷があったものと推定される。今回の調査では大型の礎石を据えた建物が検出されたが、その住人の氏名に関する資料は得られなかった。したがって当該建物の主は不明といわざるを得ないが、本稿ではとりあえず地字の由来とみられる河合氏について簡単にまとめたい。

地字と古絵図を対照すれば、「川合殿」という地名は「河合安芸守」の屋敷跡の伝承地に由来するものとみられるので最初に河合安芸守について述べる。河合安芸守は実在した人物であることが、当時の記録と文書から確認される。まず一乗谷に下向して滞在した足利義昭が永禄11年（1568）5月17日に朝倉館に御成りを行なった時の詳細な記録である『朝倉義景亭御成記』には、河合安芸守が義昭の小者衆の相伴役をつとめたことがみえる。次に『本願寺文書』の天正元年（1573）の8月20日付織田信長覚書には河合安芸守が討ち取られたことが信長方から報じられている。また『越州軍記』や『信長公記』などの編さん物にも8月13日夜の刀根坂の合戦で河合安芸守が討死したことがみえる。これらの史料から河合安芸守は越前の有力武将で朝倉氏の重臣だったことがわかる。彼の実名については自署は残っていないが、『朝倉始末記』の写本には「宗清」とするものがある。また江戸時代前期に編集されたとみられる『朝倉盛衰記』には「朝倉家士住居之事」の項に「杣山 河合安芸守」、「朝倉家士座列并素性之事」の項に「卅七河合安芸守宗清、利仁ノ流藤原」という記載がある。

さて江戸時代加賀の津幡で代々十村や肝煎、組合頭をつとめた河合家は河合安芸守の子孫の家柄で同家の由来書によれば河合安芸守宗清は杣山城主3万5千石、天正元年8月14日刀根坂で討死、時に68才だったという。その家系については、「中納言藤原時定卿四男久寿丸光宗」なる人物が貞治3年（1364）上杉憲顕の婿養子となり、上野の河合に居城し

たとい、その嫡男淡路守宗久は足利持氏のために敗れて西国に至り肥後国に居住し、永享5年(1433)に86才で病死し、彼から5代目が宗清にあたとされている。こうした由緒については今のところ事実を確認すべき良質の材料が無いけれども江戸時代の河合氏の子孫に伝えられた伝承として注目すべきであろう。

次に朝倉氏の家臣で河合氏といえば、朝倉義景の奉行人(いわゆる一乗谷奉行人)の一人である河合五郎兵衛尉吉統がいる。河合吉統は天文19年(1550)から元龜元年(1570)に至る多数の奉行人連署状にその名がみえる。そしてしばしば「御使」「在陣」などの理由により連署状に花押を欠いている。この河合吉統の家系についても詳らかでないが、義景の父孝景の近臣として永正15年(1518)に比定される孝景書状にみえる「川合五郎兵衛尉」という人物は通称が同一のことから吉統の同族と考えられる(『伊吹長兵衛家文書』)。また天文13年(1544)に比定される宗淳(孝景)書状にもその近臣として「川合三郎」がみえる(『徳山氏系図』所収文書)。彼も恐らく同族であろう。このようにこの河合氏は孝景、義景と二代にわたって近臣や奉行人として当主に近侍した家柄である。

この奉行人の河合吉統と河合安芸守が同族であるかどうか、今のところ未詳である。また活動の時期や性格がやや似ている。ただこの二人が同一人物であるかどうかについては通称(官途)や実名が異なることから一応別人とみた方が穏当であろう。確実な材料ではないが津幡の河合家の2代から6代までの実名は代々「宗」もしくは「清」のいずれかを通字としており、このことから河合安芸守の実名が宗清だった可能性が強まる。また『最勝寺文書』の元龜3年卯月15日付朝倉義景奉行人連署状の署判に付けられた付箋にも河合吉統の通称が五郎兵衛であったことがみえる。

普通越前の河合氏といえば平安末期以来の名族であるところの河合斎藤氏の流れを思いうかべるのが当然であろう。しかしながら室町時代以降の河合斎藤氏の状況は必ずしも判然としない。河合安芸守の出自についても「利仁ノ流」すなわち越前の河合斎藤氏の流れとする『朝倉盛衰記』の説と上野国の河合の出身とする子孫の家伝とではくいちがっている。朝倉氏の一族、家臣は江戸時代に大名として続いた家がなかったため、いずれも家伝資料は少なくその歴史は不明瞭である。河合氏についても全く同様であるが、そのことで河合氏の評価が下る訳ではない。むしろ一乗谷の地字にも残ってその名が記憶されているように朝倉氏の屈指の重臣だったことは間違いない。今後新史料の発見、発掘に期待される。(佐藤 圭)

4. 環境整備（第12～15図、PL.13～16）

一乗谷朝倉氏遺跡内に散在する3,000体余の石仏・石塔群のうち、とりわけ大型石仏群が集中している西山光照寺跡の石仏群について、参道脇に対面するように並んでいる石仏群の覆屋が建築後20数年を経過し、柱材をはじめとする建築部材の各所に傷みが出てきており、又風雨に曝された結果、石仏自体も傾いたり、破損したりしている現状が指摘されていた。

本寺跡については、平成6年度及び7年度に第86・87次調査、第90次調査がそれぞれ行われ、そうした成果を基に一带の面整備を実施することが予定されている。この機会に面整備工事に先立って、石仏覆屋と石仏群について、建て替え工事並びに修復工事を実施することとした。

現状では、参道に平行するように東西方向に大型石仏が対面するように立ち並んでいる。南側石仏群の西端（山側）では現在露出している石垣列に連続して、巨石を用いた石垣列、及び火葬骨を伴う埋葬遺構を3基確認した。このことから、南と北の2列の土堤状の高まりが朝倉氏時代にも存在し、又間隔は不明ながらも石仏が立て並べられていたという前提に立ち、石仏群の配列を変えることなく、現状をそのまま留どめるかたちで覆屋の建て替え、及び石仏の修復を行うことを整備計画の基本コンセプトとした。

本寺跡の整備は内容が多岐にわたること、また施工面積も広いことから2カ年に分けて実施することとし、本年度はその第1年目として、石仏覆屋建設工事（3棟分）と石仏約40体についての修復工事を実施することとした。以下、概要を述べる。

石仏覆屋建設工事

石仏覆屋は、参道の脇をかためるように向き合って平行して2棟（A・D棟）、及び入口手前に3体の石仏を安置したB棟、2体の石仏を安置したC棟の2棟が立てられている（第12図「整備計画図」参照）。更に入口階段の両側には、五輪塔を積み立てて基壇とし、その上に野ざらしの状態で石仏が1体ずつ立てられている。これらの石仏は合計40体ほどにもなる（第15図「石仏配置図」、「石仏工事一覧表」参照）。

工事は本体工事として、木造平屋建て、棧瓦葺覆屋3棟について建設工事を実施し、これにD棟背後の石垣積み直し工事、排水施設を含めた外構工事を併せて実施した。

旧覆屋骨組はほぼ3寸角の杉材を用い、基本的には釘打ちによる組付けが行われていた。横揺れ、歪みについてはスジカイで対処し、応急の組立工法に依っていたため、石仏に一

部の部材が接触したり、全体の雰囲気損なうような状況となっていた。そこで、今回の工事では補強のため柱材を一回り太くし、4寸角とした。そして芯柱には耐久性や外観上の見栄えを考慮して、クリ材を使用した。屋根材や梁、桁には旧覆屋と同じ杉材を使用した。旧覆屋に使用されたスジカイは用いず、また金具による鋸止めなどは極力隠すよう、貫を使用した。

柱数も旧覆屋より多くし、石仏の間合いを考慮して、北側のA棟では2.0～2.1m、南側のD棟では1.95～2.0mの間隔に8カ所16本とした。屋根には耐久性を考慮し、旧覆屋のものと同様、銀鼠色の越前瓦を用い、棟は凝灰岩（別畑石）による棟石積みとした。基礎石には棟石と同様、別畑石の切石を用いた。

また、排水の便を考慮し、覆屋の内側、土間及び犬走りには10cm厚の砂利を敷いて、湿気予防及び雑草の自然生育を防ぐこととした。基礎外回りにはU字溝を埋め込み、砂利と配水管を入れて暗渠排水とした。次年度に予定している「池」へ雨水が流れ込むように、配水管をそれぞれの覆屋から「池」へ埋め込んだ（第12～15図「整備計画図」、「各棟平面図・立面図」参照）。

A棟の腰板の位置は旧のものより高くし、雨風の吹き込みをできるだけ避けるよう配慮した。D棟は、現況では東西に延びる石垣に平行するように石仏が並んでおり、地表高はA棟よりわずかに高くなっている。背後には石仏に接して東西に石垣があり、これらの組合せを重視して、現状のまま残すことに主眼を置いた。そこで腰板で隠すことなく覆屋の壁に取り込んで、石仏と一体のものとして見学できるようにした。石垣列中央に「南無阿弥陀仏」と彫刻した石があり、これも前面の拝む位置から見通せて、壁に隠れないよう隙間をおくこととした。C棟の不動明王像は2mを越す大型の像であり、屋根の内側に隠れるかたちとなるために、桁高を上げて像容全体が拝めるよう配慮した。各棟の腰板内側には、漆喰を塗り込んで石仏と覆屋との調和を図った。全体の塗装はこれまでも史跡内の便益施設に用いられているこげ茶色に倣って同じ色の仕上げとした。

石垣補修工

発掘調査により、D棟の石垣に連続して西側でも石垣が約20m分検出されている。幅1mを越す巨石を用いた堅固な石垣で、天端石は倒されたり、抜かれていたりしているが、遺存度は良好であった。これをD棟石垣の天端に合わせて2～3段積み足し、補修することとした。

石仏保存修復工事

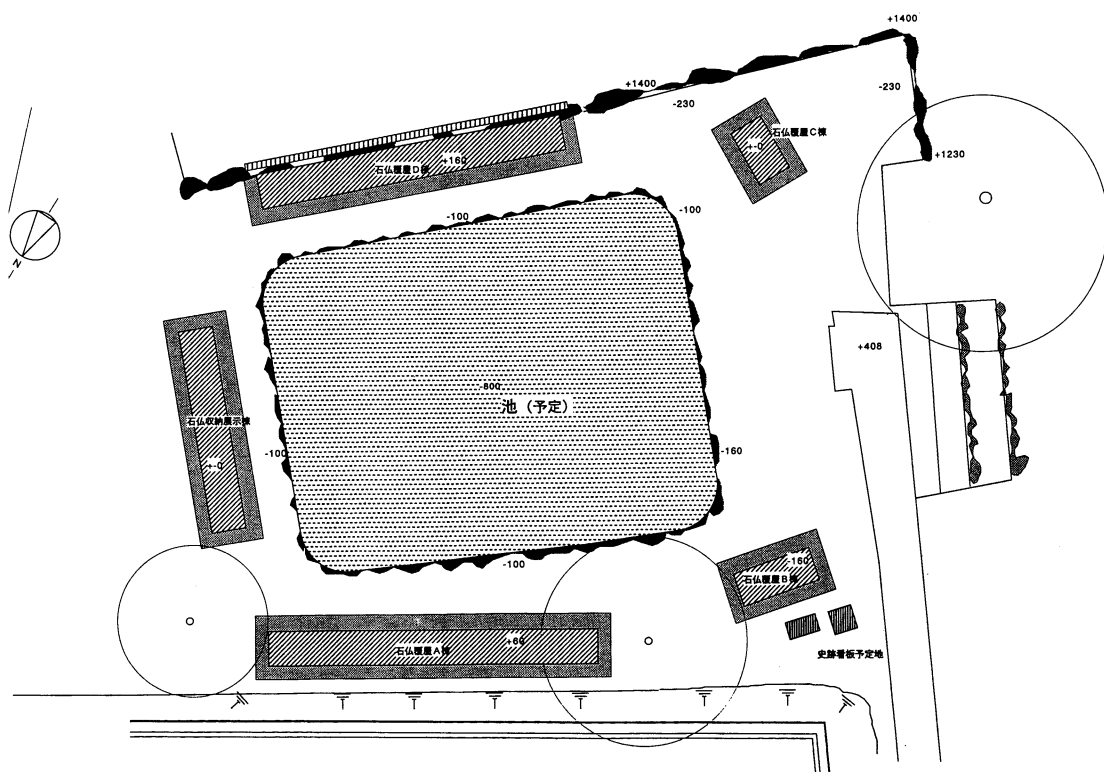
40体余の大型石仏の修復については、長い間の地盤の緩みによる石像の傾斜と、風雨・凍結・寒暖の差などによる風化作用により、彫刻の文字や装飾部分が傷み、また顔や手足部分が折損していた。胴体が半折れによって崩落したままのものもあった。これらの石仏は現在も信仰対象の「仏」であり、慣例を無視したり、儀礼を経ずにむやみに手を加えることにはためらいもあり、通常の場合、自然のままに置かれていることが多い。

しかし本寺跡の石仏については、将来を見通した保存の観点から積極的に措置を構想することを考え、必要最小限に留められた保存修復を行うこととした。修復にあたっては次の2通りについて作業を行った。

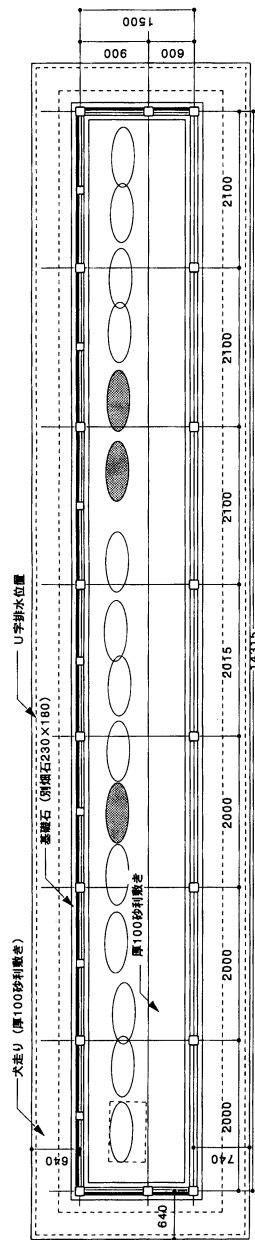
第1としては石仏が倒壊しかかっている、今後にも破損・折損の危険があるものについては、そのままの場所で据え直しを行った。

第2には指定以後の簡易の修復・接合したところから再び剥がれ落ちたもの、あるいは胴体部から半分に分れた状態になっているものや、周辺の精査によって接合可能な破片が見つかったものについては、改めて専用の接着剤を用いて接合・復原することとした。

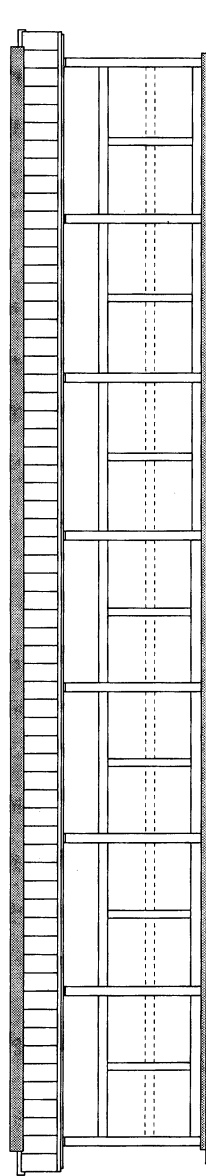
それらの修復作業の結果は表に示したとおりである。(南 洋一郎)



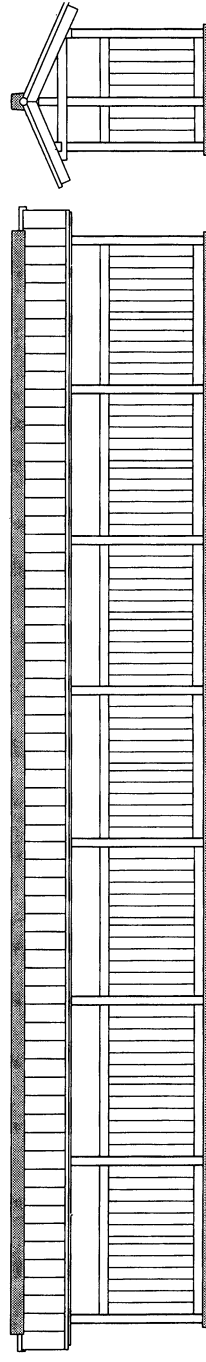
第12図 整備計画図



平面図



正面図

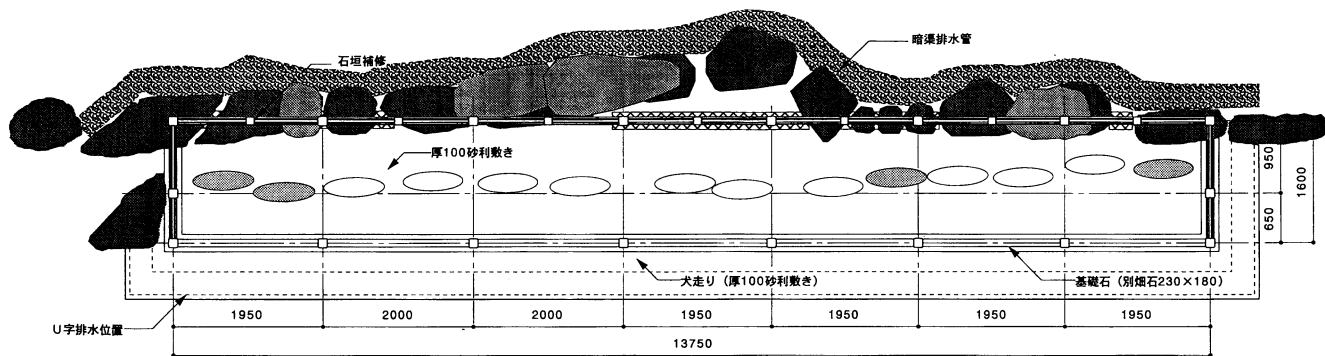


背面図

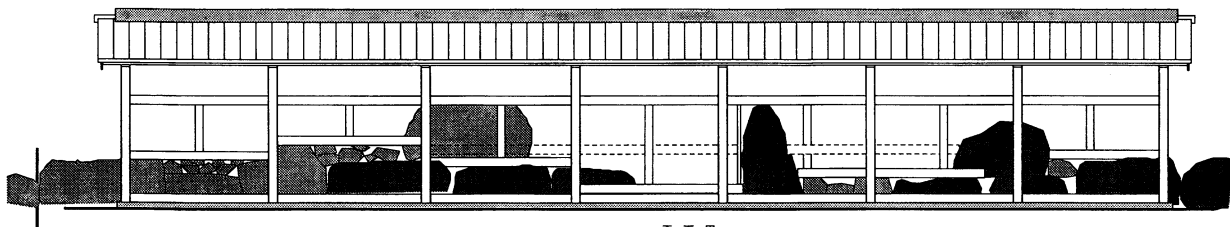
側面図

第13図 A棟平面・立面図

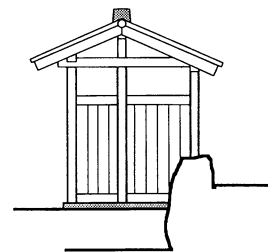
第14図 D棟平面・立面図



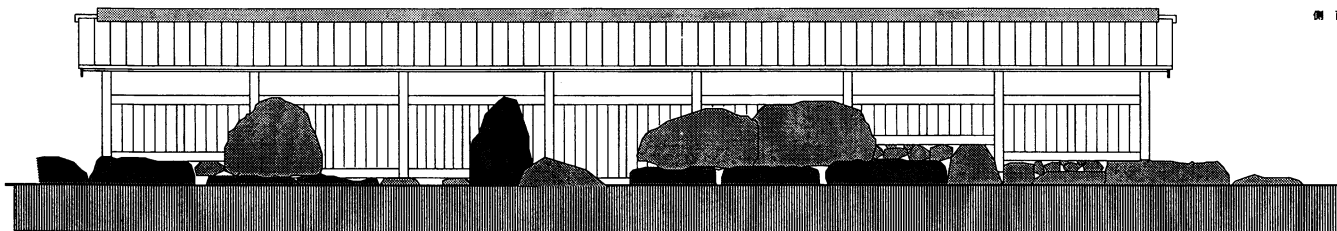
平面図



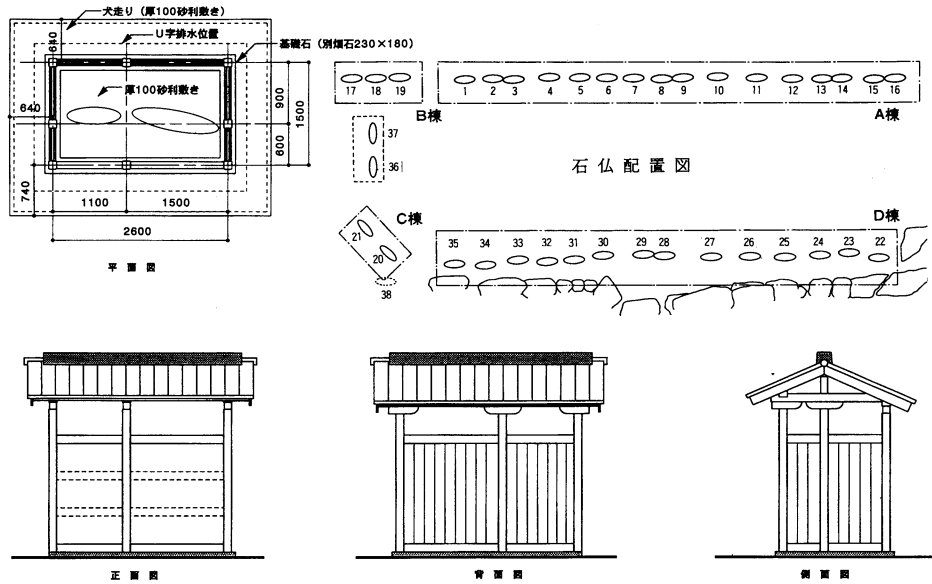
正面図



側面図



背面図



第15図 C棟平面・立面図

A棟大型石仏群				D棟大型石仏群			
No.	種別	工事内容	備考	No.	種別	工事内容	備考
1号石仏	阿弥陀如来座像	据え直し	→ko.16	22号石仏	?	据え直し、石垣の石起こす	半久基礎部分のみ 小型石仏? → ko.22
2号 "	虚空蔵菩薩立像	"	小型観音像あり ko.15	23号 "	千手観音立像	据え直し、石垣の石起こす	ko.23
3号 "	十一面千手観音立像	"、接着(光背部分)	ko.14	24号 "	阿弥陀立像	据え直し	小型石仏1 ko.24
4号 "	阿弥陀三尊像	"、接着(主頭部分)	ko.13	25号 "	阿弥陀立像	"、接着(頭・光背部・左側)	五輪塔1 ko.25
5号 "	阿弥陀如来立像	"、接着(光背部分)	顔剥落 ko.12	26号 "	地藏菩薩立像	"、接着(頭)	ko.26
6号 "	観音菩薩立像	"、接着(上半)	ko.11	27号 "	制呬迦童子	"	ko.27
7号 "	千手観音立像	"	ko.10	28号 "	千手観音立像	"	五輪塔2 ko.28
8号 "	菩薩立像	"	ko.9	29号 "	千手観音立像	"	五輪塔1 ko.29
9号 "	観音菩薩立像	"、接着(光背部分)	ko.8	30号 "	阿弥陀如来立像	"	五輪塔1 ko.30
10号 "	聖観音菩薩立像	"、接着(光背部分)	顔剥落 ko.7	31号 "	観音菩薩?	→35号と接合(顔土出→接着) 20号後ろの石仏を据える(No.38.39)	ko.31
11号 "	地藏菩薩立像	"、接着(上半・顔)	ko.6	32号 "	阿弥陀如来立像	据え直し、接着(側面破片)、上半部分はヒビ割れあり→接着補強	ko.32
12号 "	観音菩薩立像?	"	半久基礎部分の崩壊 懸るも接合せず ko.5	33号 "	阿弥陀如来立像	据え直し、接着(光背部分)	ko.33
13号 "	地藏菩薩立像	"、接着(光背部分)	ko.4	34号 "	阿弥陀三尊像	"	ko.34
14号 "	阿弥陀立像	"	ko.3	35号 "	観音菩薩?	"、←31号と接合	ko.35
15号 "	釈迦如来立像	"	ko.2	B棟大型石仏群……来年度2期工事予定分			
16号 "	不動明王像	"	ko.1	No.	種別	工事内容	備考
C棟大型石仏群				17号石仏	如意輪観音半迦像	接着(顔)	五輪塔1 →ko.21
No.	種別	工事内容	備考	18号石仏	地藏菩薩立像	"(顔)	ko.20
20号石仏	矜羯羅童子立像 コンガラドウシ	据え直し、接着、型枠による補強据え付け	型枠特注品 →ko.36 (追加工事分)	19号石仏	地藏菩薩立像	"	ko.19
21号 "	不動明王立像	"	ko.37				

※No36・37は発掘調査以前に入口脇の台座に据えてあった石仏2体を指し、現在入口手前に野ざらし状態で安置してあるものを言う。→平成10年度の建設予定展示収納棟に安置する予定。

→Ko□□ 『一乗谷石造遺物調査報告Ⅰ』所収大型石仏群番号

第3表 石仏修復工事内容表



調査区全景 (北から)



調査区北半部全景 (南から)

土塁 SA4632
(南から)



土塁 SA4631
(東から)



門 S I 4668 (東から)



門 S I 4668 (西から)



掘立柱建物 SB4634
(南から)



土塁 SA4633
(東から)



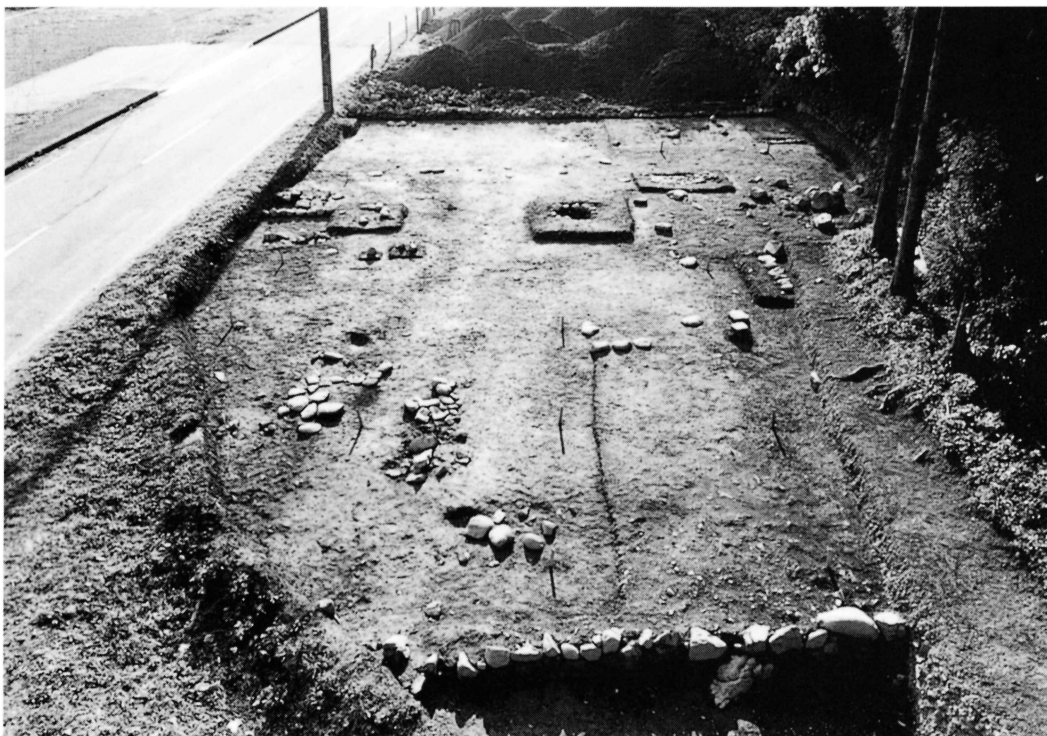
礎石建物 (土蔵) SB4635 (東から)



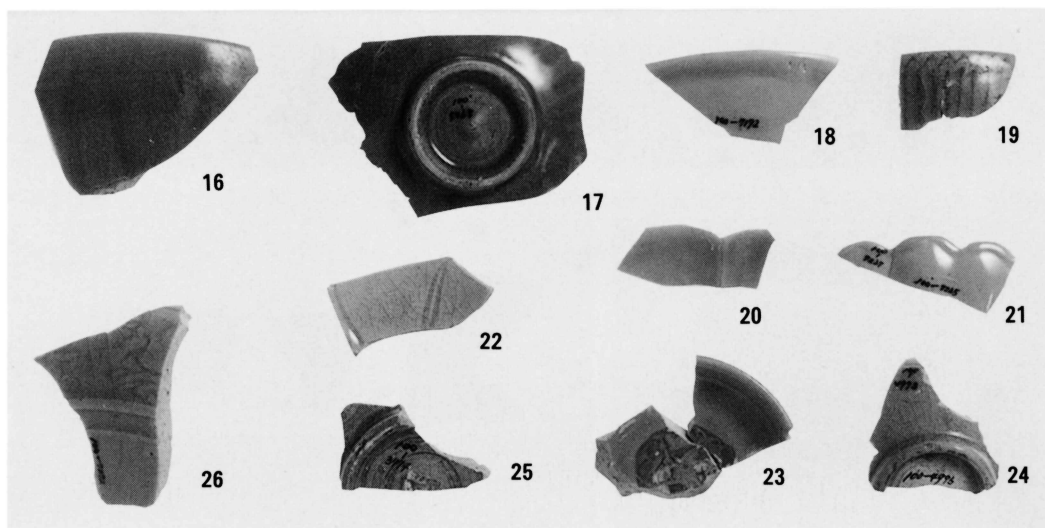
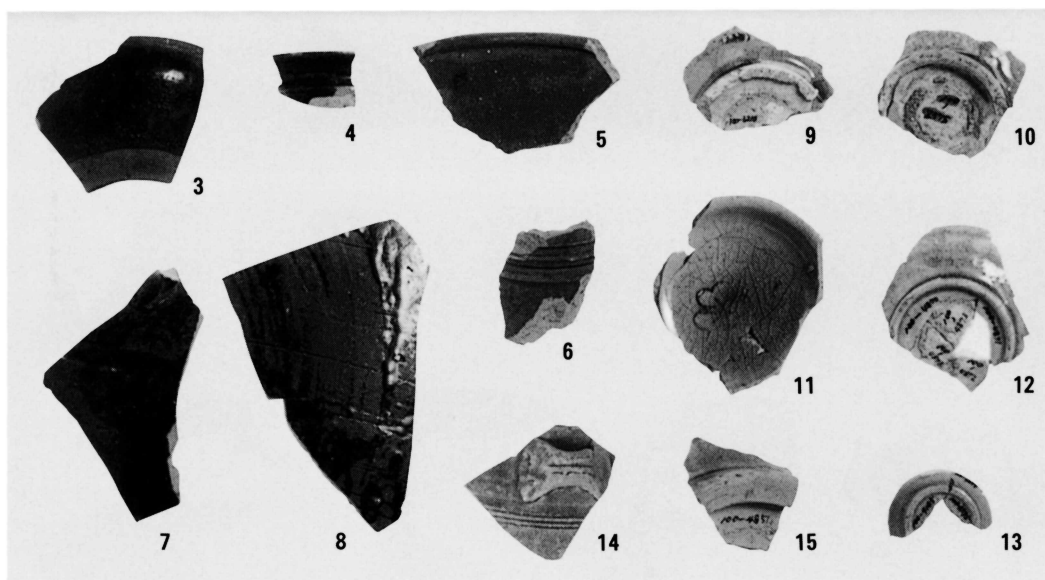
礎石建物 SB4636 (北から)



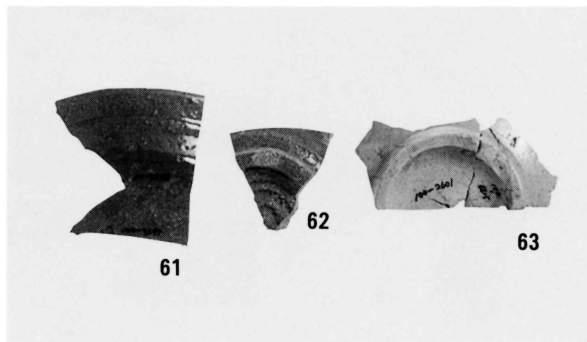
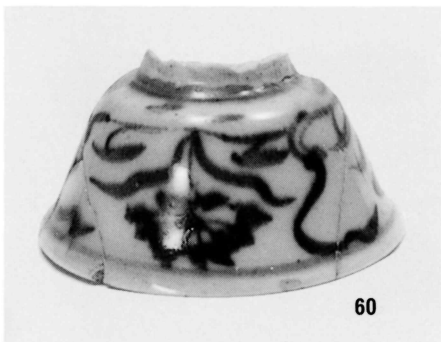
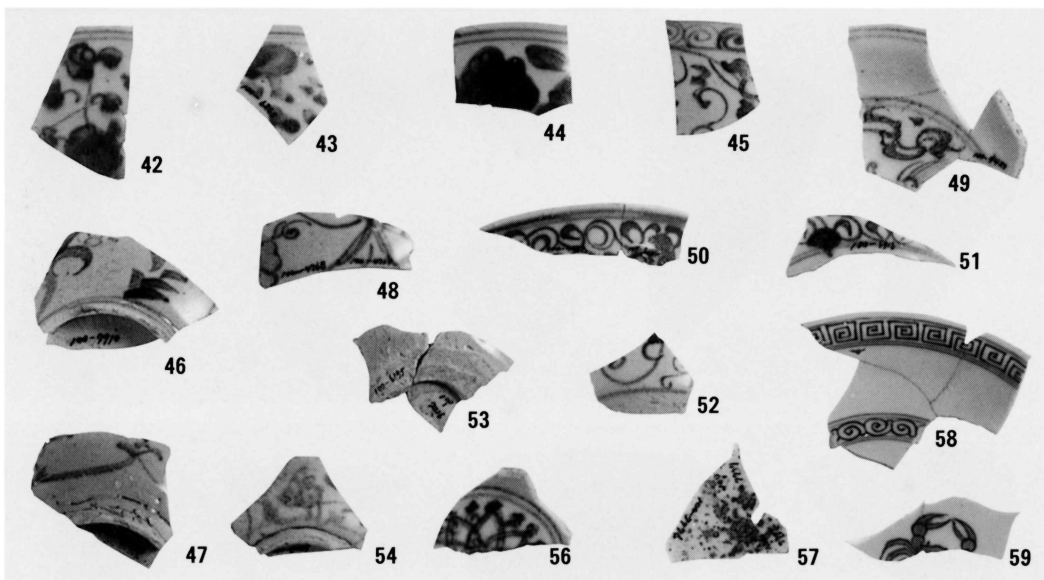
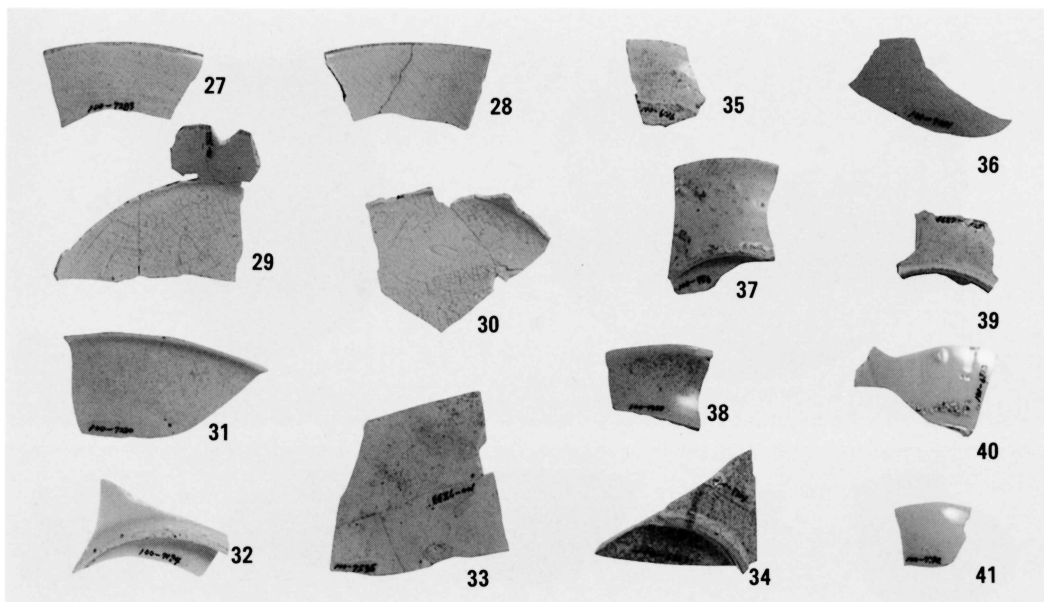
埋壙遺構 SK4672 (東から)



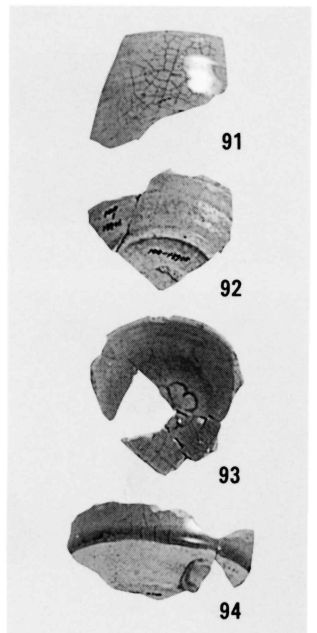
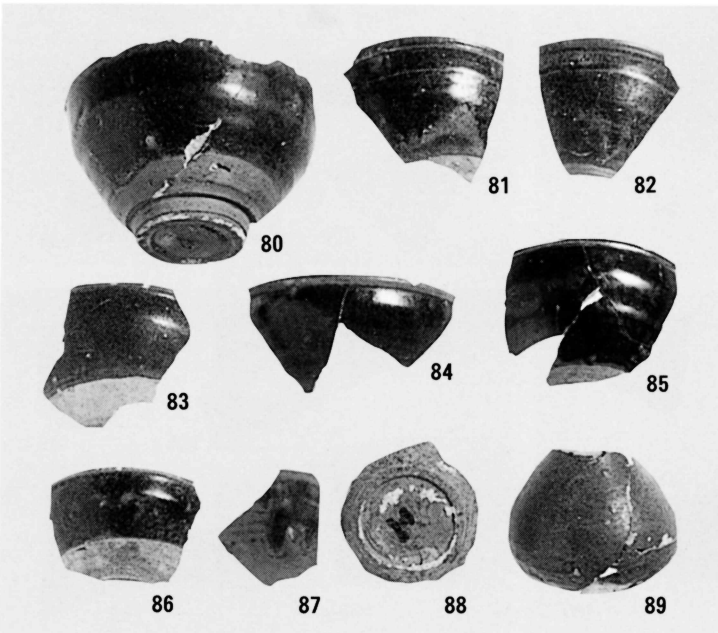
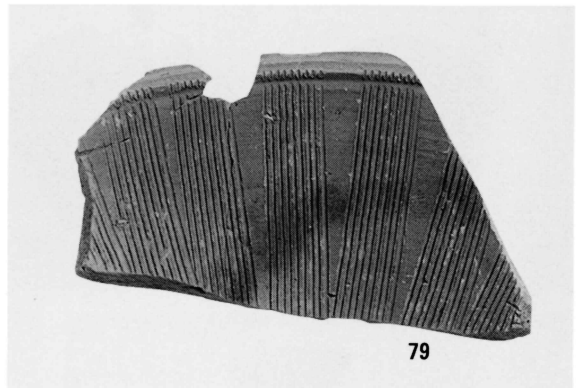
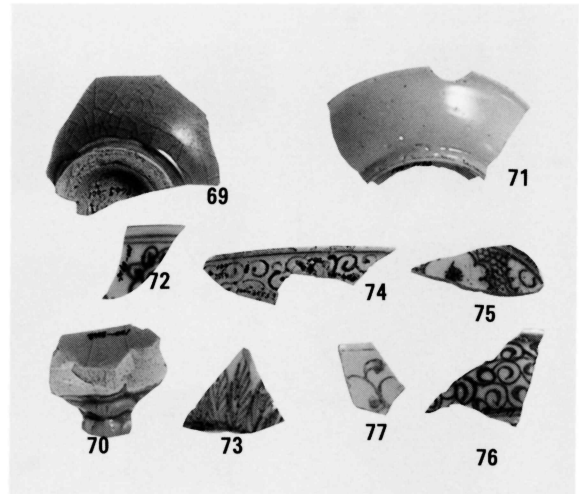
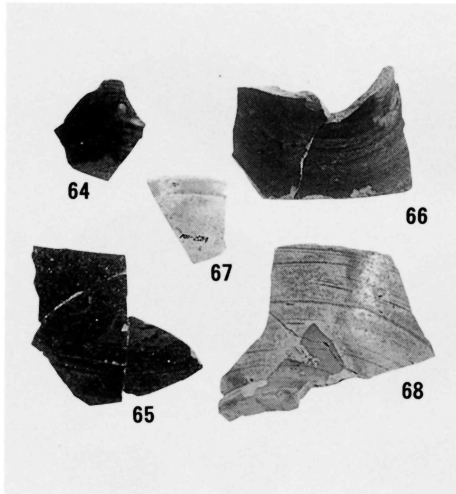
礎石建物 SB4639他 (北から)



武家屋敷A 上層出土遺物 (1)

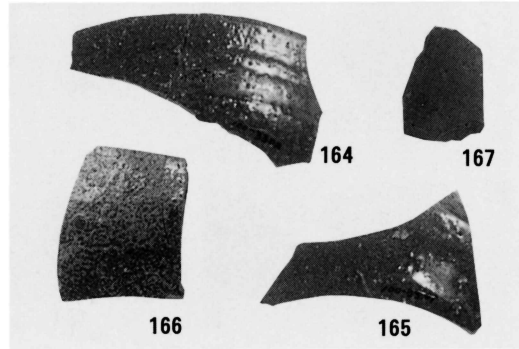
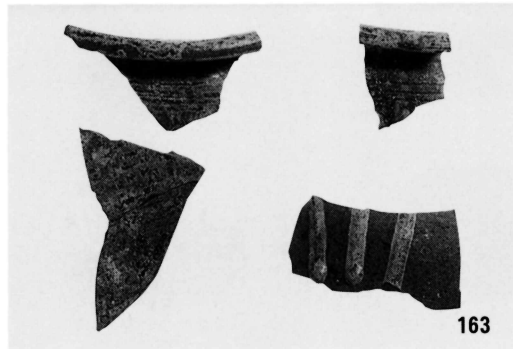
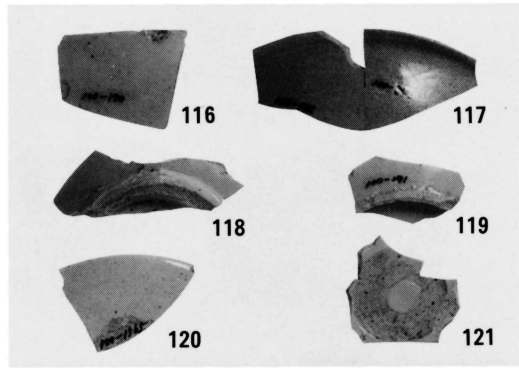
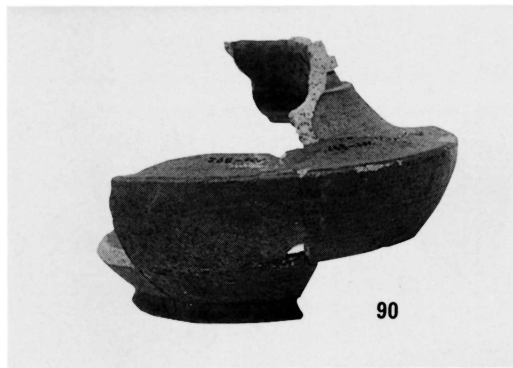
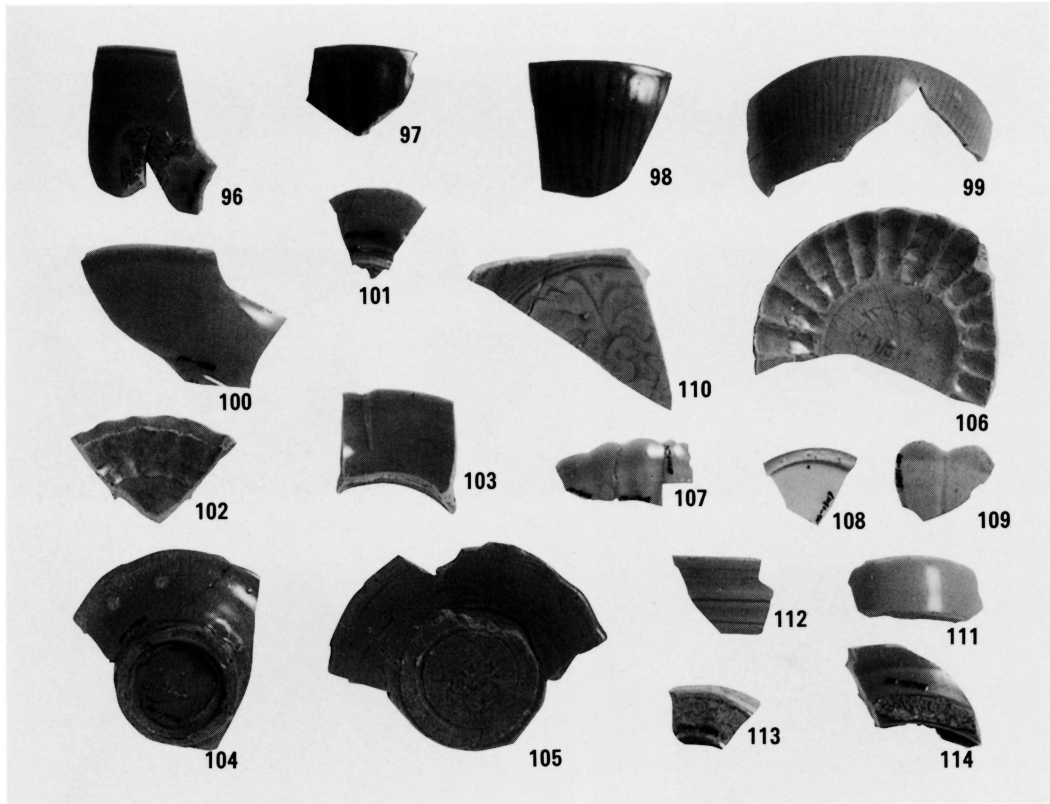


武家屋敷 A 上層出土遺物 (2)

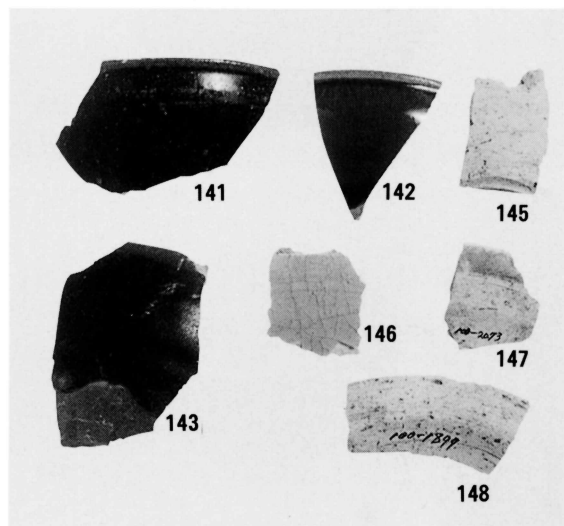
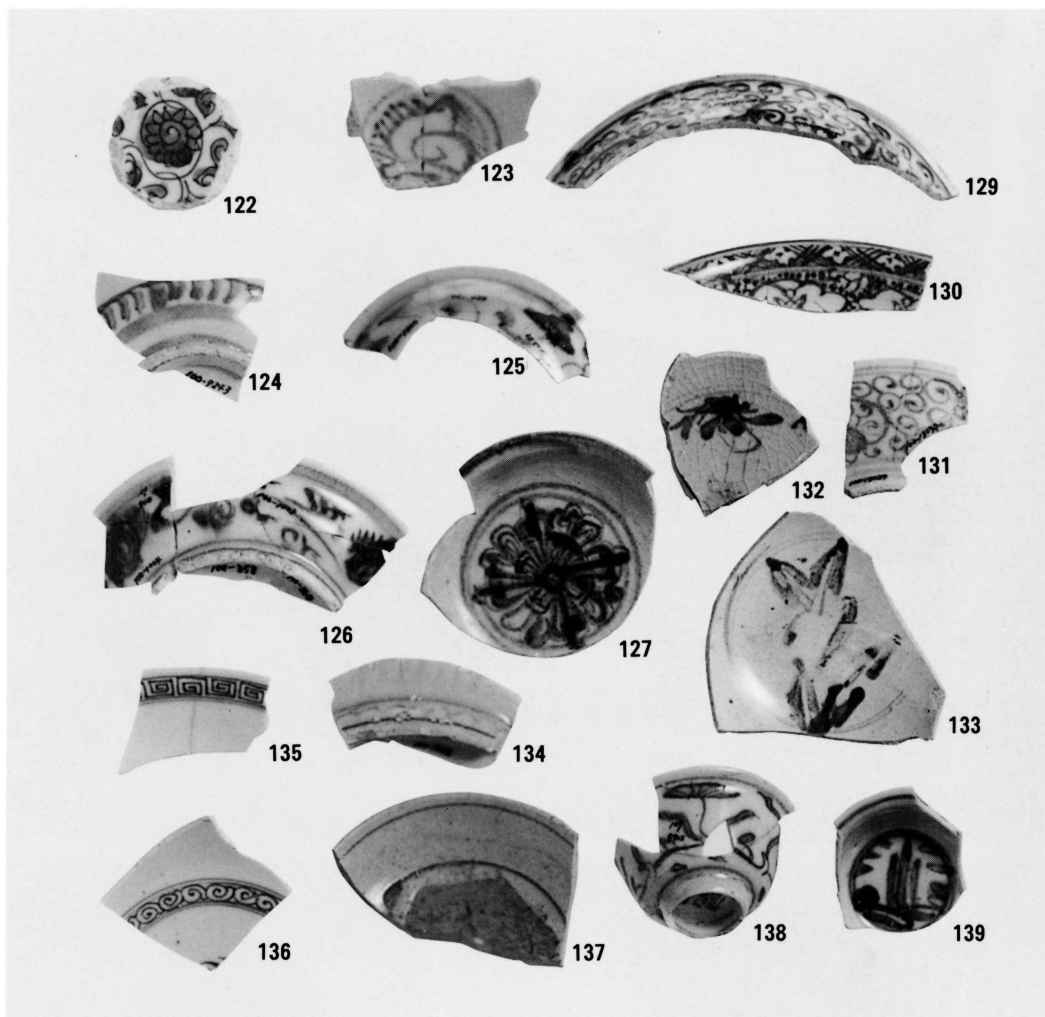


武家屋敷A 下層出土遺物 (77まで)

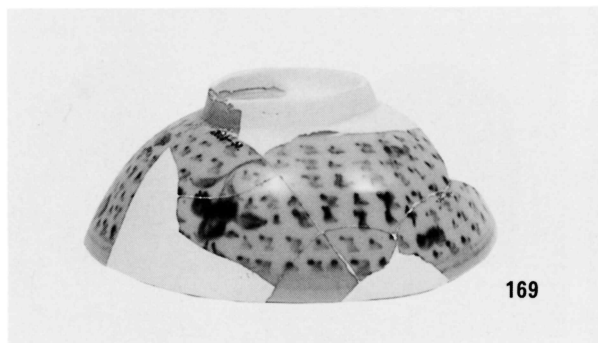
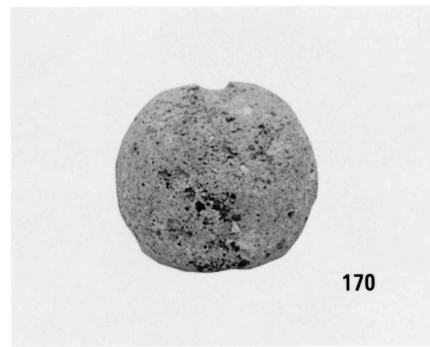
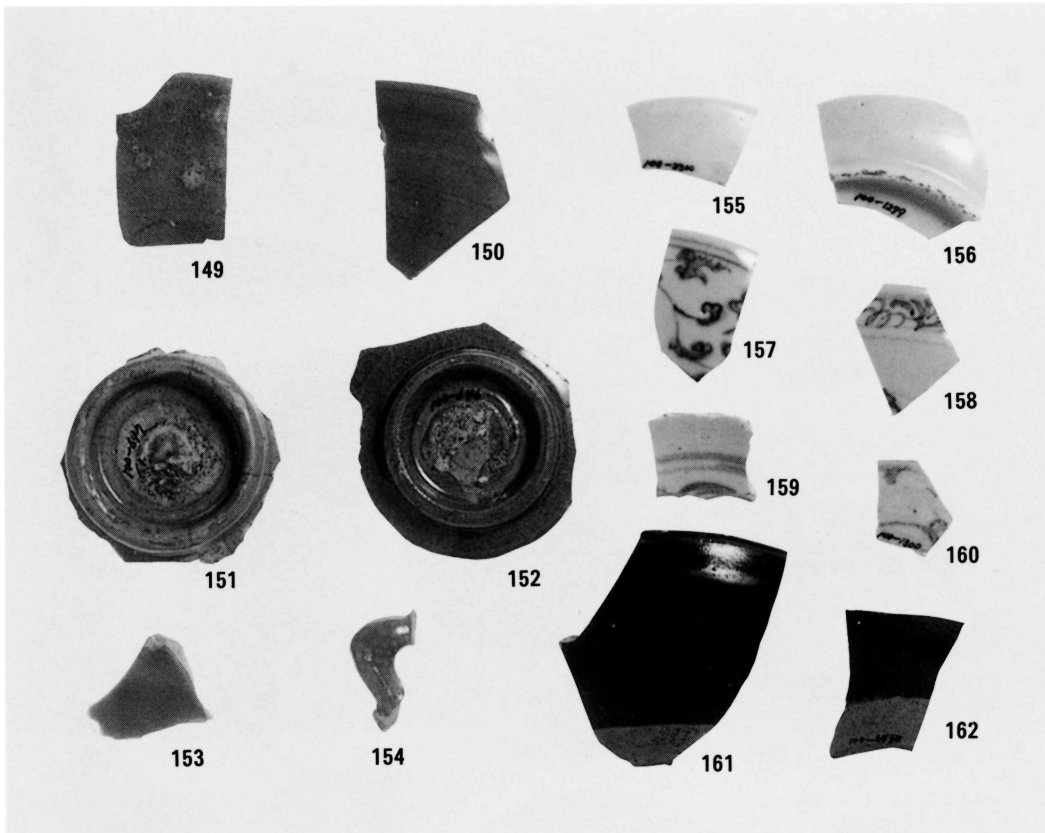
武家屋敷B 上層出土遺物 (1) (78から)



武家屋敷B 上層出土遺物 (2)



武家屋敷B 上層出土遺物 (3) (139まで) 武家屋敷B 下層出土遺物 (1) (141から)



武家屋敷B 下層出土遺物 (2) (162まで) 武家屋敷C 出土遺物 (168から)



整備地全景 (東から)



同 (西から)



石仏覆屋A棟 (南から)



石仏覆屋D棟 (北から)



石仏覆屋D棟 組み立て状況 (東から)



同 壁板のひかりつけ作業



石仏覆屋C棟 (東から)



石仏修復状況 (A棟 NO.3~5)

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡
副書名	平成9年度発掘調査環境整備事業概要(29)
シリーズ番	29
編集者名	岩田 隆 南洋一郎 佐藤 圭
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 Tel0776-41-2301
発行年月日	平成10年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
第100次調査	福井市城戸ノ内町 字川合殿、藤兵衛 川原	18210	史-31	36°59′ 37″	136°17′ 44″	970401 ~1221	2,600㎡	環境整備 に伴う発 掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第100次調査	武家屋敷	15・16世紀	土塁石垣4,礎石建物5,掘立柱建物1,門1,道路2,埋甕遺構2,溝6,井戸7,石積施設13,土蔵1,炉3	越前焼,土師質皿,瀬戸美濃焼,青磁,白磁,口禿白磁,染付,朝鮮陶磁器,漆器皿,勾玉(古墳時代)	3区画の武家屋敷を確認した。中央の区画、埋甕遺構より「飛青磁」出土。

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

平成9年度発掘調査環境整備事業概要(29)

発行年月日 平成10年3月31日

編集・発行 福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社